泉大津市文化財調査報告12

泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報4

1986・3

泉大津市教育委員会

泉大津市文化財調査報告12

泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報4

1986・3

泉大津市教育委員会

例　　言

1．本調査概報は、泉大津市教育委員会が、市内に所在する埋蔵文化財包蔵地内において、開発行為に先立って実施した発掘調査記録である。

2．本調査は、泉大津市が国庫補助事業及び、大阪府補助事業（総額5,000,000円、国補助率50%、府補助率25%、市負担率25%）として、計画・実施したものである。

3．本調査は下記の構成で実施した。

調査主体者　泉大津市教育委員会教育長　藤原勇三

調査担当者　泉大津市教育委員会社会教育課　坂口昌男

調査補助員　池田　毅・小林　清・畑中尚子・満留由美子
小原央子・藤原昭彦・大野育子・山本浩正

調査参加者　楠山享司

事　務　局　泉大津市教育委員会社会教育課(課長　鈴木実)

4．本事業は、昭和60年度事業として、昭和60年4月1日に着手し、昭和61年3月31日に完了した。

5．本書の作成は、坂口・畑中・池田が執筆し、トレース及び図版作成は、小原・藤原・大野・満留・池田が行った。

目　　次

第１章　埋蔵文化財調査の状況 …… 1
第２章　地理・歴史的環境 …… 7
　第１節　市内の地理 …… 7
　第２節　歴史的環境 …… 7
第３章　発掘調査報告 …… 14
　第１節　池上・曽根遺跡 …… 14
　第２節　豊中遺跡 …… 18
　第３節　虫取遺跡 …… 21
　第４節　大園遺跡 …… 24
　第５節　板原遺跡 …… 27
　第６節　池浦遺跡 …… 35
　第７節　穴田遺跡 …… 39
　第８節　穴師遺跡 …… 46
　第９節　遺跡範囲外試掘調査 …… 47
引用文献 …… 50
遺物観察表 …… 52
挿　　図
　第１図　遺跡分布図 …… 8
　第２図　池上・曽根遺跡調査地点図 …… 14
　第３図　池上・曽根遺跡第１地点掘削位置図 …… 15
　第４図　池上・曽根遺跡第１地点調査坑断面図 …… 15
　第５図　池上・曽根遺跡第２地点掘削位置図 …… 16
　第６図　池上・曽根遺跡第２地点調査坑断面図 …… 16
　第７図　池上・曽根遺跡第３地点掘削位置図 …… 17
　第８図　池上・曽根遺跡第３地点調査坑断面図 …… 17

第９図　豊中遺跡調査地点図…… 18
第10図　豊中遺跡第１地点掘削位置図…… 19
第11図　豊中遺跡第１地点調査坑断面図…… 19
第12図　豊中遺跡第２地点掘削位置図…… 20
第13図　豊中遺跡第２地点調査坑断面図…… 20
第14図　虫取遺跡調査地点図…… 22
第15図　虫取遺跡掘削位置図…… 23
第16図　虫取遺跡調査坑断面図…… 23
第17図　大園遺跡調査地点図…… 25
第18図　大園遺跡第１地点掘削位置図…… 25
第19図　大園遺跡第１地点調査坑断面図…… 26
第20図　大園遺跡第２地点調査坑断面図…… 26
第21図　板原遺跡調査地点図…… 28
第22図　板原遺跡第１地点掘削位置図…… 29
第23図　板原遺跡第１地点調査坑断面図…… 29
第24図　板原遺跡第２地点掘削位置図…… 30
第25図　板原遺跡第２地点調査坑断面図…… 30
第26図　板原遺跡第３地点掘削位置図…… 31
第27図　板原遺跡第３地点遺構図…… 32
第28図　板原遺跡第３地点調査坑断面図…… 33
第29図　板原遺跡第３地点グリッド断面図…… 33
第30図　板原遺跡第３地点出土遺物…… 34
第31図　板原遺跡第４地点掘削位置図…… 34
第32図　板原遺跡第４地点調査坑断面図…… 35
第33図　池浦遺跡調査地点図…… 36
第34図　池浦遺跡掘削位置図…… 37
第35図　池浦遺跡遺構図…… 37
第36図　池浦遺跡調査坑断面図…… 38

第37図　穴田遺跡調査地点図……39
第38図　穴田遺跡第１地点掘削位置図……40
第39図　穴田遺跡第１地点調査坑断面図……41
第40図　穴田遺跡第１地点遺構図……42
第41図　穴田遺跡第１地点出土遺物……43
第42図　穴田遺跡第２地点掘削位置図……44
第43図　穴田遺跡第２地点調査坑断面図……45
第44図　穴師遺跡調査地点図……46
第45図　穴師遺跡調査坑断面図……47
第46図　小松町試掘調査地点図……48
第47図　小松町試掘調査坑断面図……48

挿　　表

表１　遺跡別届出件数……１
表２　遺跡別調査件数……２
表３　昭和60年度調査一覧表……２
表４　昭和59年度調査一覧表……６

図　　版

１……池上・曽根遺跡第１地点調査坑１・第１地点調査坑２
２……池上・曽根遺跡第１地点調査拡３・第３地点調査坑
３……豊中遺跡第１地点調査坑・第２地点調査坑
４……虫取遺跡調査坑・大園遺跡第２地点調査坑
５……板原遺跡第１地点調査坑・第２地点調査坑
６……板原遺跡第３地点調査前・第３地点全景
７……板原遺跡第３地点グリッド１・第３地点グリッド２
８……板原遺跡第３地点グリッド３・第４地点調査坑
９……池浦遺跡遺構全景
10……穴田遺跡第１地点遺構全景・第２地点調査坑
11……小松町府営住宅内試掘調査坑・穴師遺跡調査坑

第１章　埋蔵文化財調査の状況

埋蔵文化財包蔵地（周知の遺跡）内に於て、土木工事等の工事を実施する場合「文化財保護法」第97条の２及び３により、工事着手の60日前までに、「土木工事等による埋蔵文化財包蔵地の発掘届」又は、「土木工事等による埋蔵文化財包蔵地の発掘通知」の提出が義務づけられている。しかし、現実には、60日前までに書類の提出が行なわれるのは極少数で、建築確認申請と同時に教育委員会へ上記書類の提出が行なわれる。昭和50年代初期に於ては、調査時期と工事時期との調整でしばしばトラブルが起こったが、50年代中頃以降は、世間全般に埋蔵文化財に対する認識が広まり、工事施工者の協力が得られるようになり、必要な対策が講じられるようになってきた。しかしこれは、本来の文化財保護の立場からの協力というのは極まれで、開発の為の露払いといった感覚でとらえられている。

さて、昭和60年度に於ける届出件数及び調査件数は、表１・２のとおりである。泉大津市内に於ては市街地化が進み、発掘調査を必要とする大規模開発がほとんど見られなくなってきており、発掘届出件数からみると、トップが個人住宅建設で全体の41％を占め、それにつづいて住宅に伴うガス管埋設工事が32％で、両者を合わせると全体の⅔以上となっている。この傾向は今後も続くものと思われる。これに応じて調査方法も、木造住宅建設による掘削深度の浅い基礎工事や、ガス管埋設工事による狭小な掘削面積などから、立会調査が多数を占める結果となっている。ここで問題になるのは、発掘届出件数と調査件数の間に大きな隔たりがみられることである。（調査率58％）これは、工事の事前着工によるもの、又は、教育委員会への工事着手前の連絡がないものが原因であると思われる。この差を縮少するのが、今後の課題である。

本年度に於ける調査の実施日・地番・遺跡名等は表３に示しておく。但し、本

表１　遺跡別届出件数　（昭和60年４月１日～昭和61年２月28日）

遺跡名	件数	内訳				
		住宅	ガス	工場・倉庫	店舗・事務所	その他
池上・曽根遺跡	27	15	7	2	1	2
豊中遺跡	25	9	9	4	2	1
虫取遺跡	18	8	6	3	1	0
大園遺跡	13	2	5	3	2	1
板原遺跡	10	2	4	3	0	1
池浦遺跡	6	5	0	1	0	0
穴田遺跡	5	2	2	1	0	0
穴師遺跡	3	1	1	0	0	1
七ノ坪遺跡	2	2	0	0	0	0
古池遺跡	1	0	1	0	0	0
助松遺跡	1	0	0	0	0	1
薬師寺跡	1	0	1	0	0	0
計	112	46（41％）	36（32％）	17（16％）	6（５％）	7（６％）

書の編集の都合上、昭和61年２月28日までとなる。なお前年度報告以後に実施した調査は表４のとおりである。又、発掘調査を実施した分については、調査概要を後述する。前年度に調査を実施した穴田遺跡の２地点についても合わせて報告しておく。

（坂口）

表２　遺跡別調査件数

（昭和60年４月１日～昭和61年２月28日）

遺跡名	立会調査	発掘調査
池上・曽根遺跡	9	3
豊中遺跡	11	2
虫取遺跡	8	1
大園遺跡	6	3
板原遺跡	3	4
池浦遺跡	5	1
穴田遺跡	5	0
穴師遺跡	2	0
古池遺跡	1	0
薬師寺跡	1	0
遺跡範囲外	0	1※
計	51	15

（※ 試掘調査）

表３　昭和60年度調査一覧表

（昭和60年４月１日～昭和61年２月28日）

月日	調査地番	遺跡名	調査内容	備考（調査番号）
4・3	北豊中町２丁目366－44	豊中遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削は盛土内におさまっており支障なし。
4・9	尾井千原地内	大園遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
4・22 ～ 4・23	池浦町5丁目 335－1,336 337，338	池浦遺跡	発掘調査	工場建設に先立つ調査で、時期不明のピット検出。（ＩＫＵ－４）
4・23	森町１丁目 61－21 96－42	池上・曽根遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削は盛土内におさまっており支障なし。
4・25	豊中264，265	豊中遺跡	立会調査	水槽建設に係わる工事で、砂利層が見られ、遺構・遺物等は検出されず。
5・7	板原84	板原遺跡	発掘調査	倉庫建設に先立つ調査で、遺構・遺物等は認められず。(8502)
5・8	板原25	板原遺跡	発掘調査	事務所建設に先立つ調査で、遺構・遺物等は認められず。(8503)
5・11	末広町２丁目157－11	大園遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
5・11	東豊中町２丁目９－11	豊中遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
5・11	北豊中町３丁目７	豊中遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。

月日	調査地番	遺跡名	調査内容	備考（調査番号）
5・21	北豊中町３丁目976－22	豊中遺跡	立会調査	基礎掘削は床土上面までで、遺構・遺物等は認められず。
5・27	末広町１丁目331－57	大園遺跡	立会調査	住宅建設による基礎掘削で、遺構・遺物等は認められず。
5・31	寿町67－３	池浦遺跡	立会調査	基礎掘削は床上上面までで、遺構・遺物等は認められず。
6・３	森町２丁目227－17	池上・曽根遺跡	発掘調査	溜池を埋め立てた部分で、遺構・遺物等は検出されず。（8504）
6・５	綾井22－１，－２，23，24	大園遺跡	発掘調査	倉庫建設工事に先立つ調査で、遺構は認められず。土師器片出土。（8505）
6・５	池浦町２丁目580	虫取遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
6・５	我孫子177	虫取遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
6・10	下条町294	池浦遺跡	立会調査	住宅建設による基礎掘削で、遺構・遺物等は認められず。
6・17	森町１丁目２－10	池上・曽根遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
6・17	北豊中町２丁目366－54	豊中遺跡	立会調査	ガス管撤去及び埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
7・４	我孫子378－１	穴田遺跡	立会調査	倉庫建設による基礎掘削で、遺構・遺物等は認められず。
7・５	板原344－５，－６，345－11，－12	虫取遺跡	立会調査	住宅建設による基礎掘削で、遺構・遺物等は認められず。
7・５	東豊中町１丁目14－７	古池遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
7・16	綾井58－１	大園遺跡	発掘調査	店舗建設工事に先立つ調査で、古墳時代ピット検出。（8506）
7・17	寿町623－５	池浦遺跡	立会調査	住宅建設による基礎掘削で、遺構・遺物等は認められず。
7・19	宇多1048－17	虫取遺跡	立会調査	住宅建設による基礎工事で、遺構・遺物等は認められず。
8・１	末広町２丁目157－６	大園遺跡	立会調査	保育園舎建設による基礎掘削で、遺構・遺物等は認められず。
8・６	曽根町２丁目５－１	池上・曽根遺跡	立会調査	住宅建設による基礎掘削で、遺構・遺物等は認められず。
8・７〜8・22	板原５，６，７，８，10－１	板原遺跡	発掘調査	宅地造成工事に先立つ調査で、溝状遺構検出。（ＩＴ－１）
8・13	小松町12，13	―――	立会調査	住宅建設工事に先立つ試掘で、遺構・遺物等は認められず。（8507）

月日	調査地番	遺跡名	調査内容	備考（調査番号）
8．13	我孫子72－3	穴田遺跡	立会調査	住宅建設による基礎掘削で、遺構・遺物等は認められず。
8．21	綾井74－1	大園遺跡	立会調査	倉庫建設による基礎掘削で、遺構・遺物等は認められず。
8．22	曽根町1丁目133－3	池上・曽根遺跡	発掘調査	住宅建設に先立つ調査で、遺構・遺物等は認められず。(8508)
8・26	虫取126－3	虫取遺跡	立会調査	住宅建設による基礎掘削で、遺構・遺物等は認められず。
8・28	穴田25－4	穴田遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
9・4	森町2丁目77－4，－5 78－46，－47 190－5，－6	池上・曽根遺跡	発掘調査	住宅建設工事に先立つ調査で、土師器片・須恵器片検出。(8509)
9・12	豊中408－1	豊中遺跡	発掘調査	倉庫建設に先立つ調査で、遺構・遺物等は認められず。(8510)
9・12	我孫子525－6	穴師薬師寺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
9・27	北豊中町2丁目986－4	豊中遺跡	立会調査	事務所建設による基礎掘削で、遺構・遺物等は認められず。
10・4	末広町2丁目	大園遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による堀削で、観察の結果支障なし。
10・21	森町2丁目227－91	池上・曽根遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削は盛土内におさまっており、支障なし。
10・24	穴田25－4	穴田遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
10・25	曽根町2丁目190～210	池上・曽根遺跡	立会調査	水道管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
10・25	曽根町2丁目190～210	池上・曽根遺跡	立会調査	排水ボックスカルバート埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
10・25	池浦町5丁目9－23	穴師遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
10・29	寿町76－6	池浦遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削は盛土内におさまっており支障なし。
10・30	虫取119	虫取遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で観察の結果支障なし。
10・31	森町1丁目53－2	池上・曽根遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削は盛土内におさまっており支障なし。
11・7	板原41	板原遺跡	発掘調査	倉庫建設に先立つ調査で、遺構・遺物等は認められず。(8511)
11・18	池浦町2丁目554－2	池浦遺跡	立会調査	倉庫建設による基礎掘削で、遺構・遺物等は認められず。

月日	調査地番	遺跡名	調査内容	備考（調査番号）
11・25	板原155	板原遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
11・26	森町1丁目109	池上・曽根遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削は盛土内におさまっており支障なし。
12・3	東豊中町2丁目35－3	豊中遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削は盛土内におさまっており支障なし。
12・3	北豊中町3丁目979－7	豊中遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削は盛土内におさまっており支障なし。
12・4 ～ 12・7	豊中700	穴師遺跡	立会調査	水槽設置工事による掘削で、遺物包含層が認められる。(8512)
12・9	板原75－3	板原遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削は盛土内におさまっており支障なし。
12・10	我孫子151－2	板原遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削は盛土内におさまっており支障なし。
1・13	北豊中町2丁目366－66	豊中遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削は盛土内におさまっており支障なし。
1・13 ～ 1・31	綾井55－1	大園遺跡	発掘調査	店舗建設に先立つ調査で、古墳時代ピット外検出・整理中。（ＯＺ－１）
1・14	豊中266	豊中遺跡	立会調査	倉庫建設による基礎掘削で遺構・遺物等は認められず。
1・16	虫取99	虫取遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
1・29	板原1048	虫取遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
2・13	我孫子38－1	穴田遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削は盛土内におさまっており支障なし。
2・17	曽根町2丁目5－1	池上・曽根遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削は盛土内におさまっており支障なし。
2・20	板原260，260－2	虫取遺跡	発掘調査	倉庫建設に先立つ調査で、遺構・遺物等は認められず。(8601)
2・24	北豊中町3丁目977－8	豊中遺跡	発掘調査	倉庫建設に先立つ調査で、遺構は認められず。(8602)

表 4　昭和59年度調査一覧表

（昭和60年３月１日～昭和60年３月31日）

月日	調査地番	遺跡名	調査内容	備考（調査番号）
３・15	虫取47－４	虫取遺跡	立会調査	銀行建設による基礎掘削で、遺構・遺物等は認められず。元ガソリンスタンド。
３・16	東豊中町２丁目973－７	豊中遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削は盛土内におさまっており支障なし。
３・16～３・20	我孫子73－３	穴田遺跡	発掘調査	倉庫建設に先立つ調査で、中世以降の水田跡（？）検出。（ＡＤ－１）
３・22	旭町22－15	東雲遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
３・30	我孫子41	穴田遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
３・30	我孫子72－１	穴田遺跡	発掘調査	住宅建設に先立つ調査で、遺構・遺物等は認められず。（8501）

第２章　地理・歴史的環境

第１節　市内の地理

大阪府泉大津市は、大阪平野南部（和泉地域）の海岸部に位置する。市の西側は大阪湾に面しており、北側は高石市、南側は大津川を隔てて泉北郡忠岡町と隣接している。東側は和泉市と接し、山間部は存在しない。市の面積は11.68㎢、人口は67,621人（昭和61年１月31日現在）で、市としては小規模な存在である。

市を南北に横切って、私鉄南海電鉄本線が走り、大阪・和歌山間を結んでいる。市内には、北側から、北助松・松之浜・泉大津の３駅があり、急行の停車する泉大津駅から大阪難波駅までは、急行で約20分の距離にある。

この路線と平行して、市内西部の海岸沿いを、府道堺阪南線・大阪臨海線の道路が、また、東部を国道26号線（旧第２阪和国道）がそれぞれ延びている。さらに市内の東西を結ぶ道路としては、松之浜曽根線・美原泉大津線・泉大津中央線・泉大津粉河線がある。

泉大津市は、昭和17年、府下では７番目に市になっており、その市街地は南海電鉄本線と、府道堺阪南線に沿って、古くより住宅と商工業用建物で形成されてきた。市の東部は、水田地帯が広がっていたが、昭和45年に開催された日本万国博覧会を契機に、商業都市大阪のベッドタウンとして大阪南部が注目されだし、ここにも宅地開発の波が押し寄せ、土地区画整理事業も完了し、市街地化が現在も進行している。こうして、市域全体が市街化区域となり、市内に20数個あった溜池もその大半が埋め立てられ、住宅・団地・工場・公園・学校・公民館などに転用されている。

この地域の地場産業の一つに、毛布を中心とする織物工業があり、特に毛布の生産高は全国の96％を占めている。又、近年、海岸側が堺・泉北臨海工業地帯として埋め立てられ、工場や倉庫が立ち並び、また九州小倉と結ぶカーフェリーが発着するなど、港湾の都市としても発展してきている。

さらには、現在、泉州沖の関西国際空港建設に伴って、交通網の整備が行なわれており、空港貨物基地誘地、産業廃棄物処理のフェニックス計画など新たな発展を目指している。

第２節　歴史的環境

泉大津市は、市内各地で実施された遺跡の発掘調査結果により、古くから、生活の場・生産の場として開けていたと考えられる。現在、市内には、大園、豊中、古池、板原、池上・曽根、池

第1図　遺跡分布図　1.大園遺跡　2.森遺跡　3.牛滝塚　4.助松遺跡　5.池上曽根遺跡　6.豊中遺跡　7.七ノ坪遺跡　8.穴師遺跡　9.池浦遺跡　10.東雲遺跡　11.古池遺跡　12.穴師小学校校庭遺跡　13.穴師薬師寺跡　14.穴田遺跡　15.虫取遺跡　16.板原遺跡

浦、虫取、東雲、七ノ坪、穴師、穴田といった集落遺跡や、穴師薬師寺跡、大福寺跡、泉穴師神社などがみられる。これら市内の各遺跡を中心にし、さらに周辺の市町村の遺跡にも言及しながら、この地域の歴史的環境の概略を、ここに述べていくこととする。

—旧石器時代—

日本に於ける旧石器時代は、今から約10万年前から１万2,000年前までの間で、洪積世に属する。この時代の人々は、狩猟採集生活を送り、一定の領域を移動していたと考えられる。

泉大津市内では、現在のところ、旧石器時代の遺物は発見されていない。泉大津・和泉・高石の３市にまたがる大園遺跡の高石市側からは、後期旧石器時代のナイフ形石器と、旧石器時代終末期より縄文時代草創期・早期の有舌尖頭器が出土している①。また、隣接する和泉市の大床遺跡からは、サヌカイト製のナイフをはじめ、石核・剥片約30個が検出された②。和泉市伯太北遺跡・和気遺跡③、堺市野々井遺跡・百舌鳥本町遺跡、岸和田市西山遺跡・琴山遺跡・葛城山頂遺跡・海岸寺山遺跡等で、旧石器時代に属すると思われる石器や剥片の出土がある。

—縄　文　時　代—

日本で最初の土器文化の時代にあたる縄文時代は、今から約１万2,000年前から2,300年前までの間と考えられている。この時期の遺跡は、東北・関東地域や中部山岳地帯に多く、近畿地域ではあまり見られない。

昭和60年度に大阪府埋蔵文化財協会が調査していた和泉市仏並遺跡から、縄文時代早期後半（推定8,000年前）の鵜が島台式土器の破片や、縄文後期前半（推定3,800年から4,000年前）の素焼きの土製仮面が発見されたのは④非常に珍しいケースである。この仮面は、縄文人が悪霊退治や厄払いの神事などでかぶったとみられ、同じような仮面が出土している東日本との文化の交流を探る貴重な資料になると考えられている。泉大津市内に於ては、現在のところ縄文時代の明確な遺構は発見されていないが、板原遺跡では、後期の中津式を伴う自然流路や福田ＫⅡ式の遺構面、晩期の溝状遺構やピット等が報告されている⑤。又、豊中遺跡でも埋積谷の旧河道内より中期末の土器片が発見される⑥など、縄文人の存在を窺わせる。虫取遺跡では、晩期に属する土器が、弥生時代前期の土器と共伴して出土し⑦、縄文時代から弥生時代への過渡期の接点を示す好資料を与えてくれた。

周辺の遺跡を見てみると、和泉市では信太山丘陵から前期の打製石匙、伯太北遺跡で中期から後期の土器、府中遺跡から石棒・石鏃と共に後期中葉の土器をはじめ、池上・曽根遺跡や万町北遺跡からも遺物の出土がみられた。堺市からは、万崎遺跡・石津町東遺跡・南榎町遺跡・百舌鳥

陵南遺跡をはじめ四ツ池遺跡などがあげられる。又、岸和田市に於ては、葛城山頂から中期の土器、箕土路遺跡で中期初頭、春木八幡山で後期より晩期にかけての土器が出土し、西山遺跡や下池田遺跡からも土器片が出土している。

このように、縄文時代遺物の発見例はあるが、遺構の稀薄な地域と言われてきた和泉も、今後の開発に伴う調査で数多くの成果が得られるものと期待される。しかしその反面、遺跡の破壊が急速に進むことも事実である。

—弥　生　時　代—

縄文時代から弥生時代へと移行する過程を示す遺跡が、福岡市板付遺跡をはじめ九州各地で発見されるようになって、その過渡期の様子が徐々に明らかになりつつある。近畿地方に於てもその例外ではない。弥生文化の特徴である稲作農耕や金属器使用の初期段階が、水田跡や縄文土器の籾痕あるいは木製品より窺い知ることができ、過渡期の文化の複雑さを表わしている。このようにＢＣ200年頃に大陸より伝播され北九州に始まった弥生文化は急速に東進し、近畿地方まで伝わるのにさほど時間はかからなかったようである。堺市四ツ池遺跡出土の縄文土器に籾痕が認められ[8]、和泉地域に於ける最初の米作りであると考えられている。このように弥生時代に始まった米作りではあるが、弥生人の食糧として、年間を通じて賄えるほどの収穫は望めず、依然として米以外の食料、特に自然食料に多く依存せざるをえなかった[9]。

泉大津市池浦遺跡は、前期中段階に形成された集落で、低位段丘に位置し、居住区は人工によるＶ字溝で限定されていたと思われる。この集落は短期間のうちにその生命を失ったようで、中期以降の土器は発見されていない。虫取遺跡も人工のＶ字溝が検出され、第１様式新段階から第２様式の土器が、晩期の縄文土器を伴って大量に放棄されていた[10]。弥生時代の全期間を通じて、生成・発展の過程を知らしめる遺跡として池上・曽根遺跡があげられる。和泉市池上町から泉大津市曽根町に及ぶ大集落遺跡で、中期には集落は環濠で限定されていたのが、後期になると分散の傾向を示し、やがては古墳時代集落へと移行する様子が明らかにされると共に、大量の出土品等から、中心的な集落として存在していたことが窺える。この時代の水田は、七ノ坪遺跡によって知ることができる。他に、遺跡としての実態は不明であるが、中期の壺棺が出土した穴師小学校校庭遺跡[11]や、有鉤銅釧を出土した古池遺跡[12]、砂丘遺跡かと思われる助松遺跡[13]などがある。

周辺の遺跡では、前期に始まるものとして、堺市諏訪森遺跡・鳳遺跡、岸和田市春木八幡山遺跡[14]・加守三昧山遺跡などがあり、中期では、和泉市万町北遺跡、府中遺跡・和気遺跡、高石市大園遺跡、岸和田市田治米遺跡・箕土路遺跡・畑遺跡・上松中尾遺跡など、後期では、和泉市惣ノ池遺跡・観音寺遺跡、堺市田出井町遺跡・三国ヶ丘遺跡・金岡遺跡などがある。

—古　墳　時　代—

古墳時代は、開始に諸説があり、各々一理あって断定し難いのであるが、凡そ３・４世紀で、７世紀までの高塚墳墓に代表される時期である。それは、地方豪族が軍事的結合をもって地域集団を形成し、やがて古代国家へと昇華してゆく時代として把えることができる。

泉大津市に於ては、現在のところ古墳は存在しないが、古い地形図によると、塚らしいものが見られ、かつては存在していた可能性がある。又、東雲遺跡からは埴輪片が出土しており、古墳もしくは祭祀遺跡との関連が考えられる。

和泉市黄金塚古墳[15]は、主体部が木棺直葬の粘土槨を有する前期の前方後円墳で、景初三年銘の画文帯神獣鏡を埋納していたことで有名である。岸和田市摩湯山古墳は全長約200ｍの大型前方後円墳で、その築造法として丘尾切断説を首肯させる。他に久米田古墳群があげられる。前期から中期にかけては和泉市丸笠古墳がある。中期は古墳の全盛時代ともいえ、濠をめぐらした大型の前方後円墳に象徴されるが、堺市百舌鳥古墳群はその代表の一つである。帆立貝式古墳として、和泉市貝吹山古墳・玉塚古墳、高石市大園古墳などがある。後期になると、古墳築造を可能とした階層範囲が広がり、群集墳として形成された。付近では、和泉市信太千塚、堺市陶器千塚があげられる。高石市富木車塚古墳は多くの主体部を有する前方後円墳であった。

集落遺跡は、昭和50年代の道路建設に先立って実施された調査で、急激に増加した遺跡である。泉大津市における遺跡も例外ではない。古墳時代初期の集落として、豊中遺跡、古池遺跡、七ノ坪遺跡、東雲遺跡があり、竪穴住居で構成されている。七ノ坪遺跡は、この住居と共に、弥生時代からの伝統的墓形態である方形周溝墓や土坑墓も発見され[16]ており、高塚墳墓の被葬者とは格段の差が歴然と存在することがわかる。又、生産の場としての水田跡も検出され[17]、集落の一つのまとまりを示している。この他遺物散布地として、板原遺跡、虫取遺跡、助松遺跡、穴師遺跡などがある。

周辺部の遺跡では、和泉市万町北遺跡・府中遺跡・上町遺跡、高石市大園遺跡・水源地遺跡・岸和田市重の原遺跡・土生遺跡、貝塚市畠中遺跡・麻生中遺跡などがあり、それぞれ調査報告書が刊行されている。

—飛鳥・白鳳・奈良・平安時代—

朝廷や巨大氏族は大陸文化や朝鮮半島の文化を積極的に摂取し、宮都の造営や寺院の建立に力をそそいだ。その背後には仏教の影響が大きく働いている。非常な困難を極めた遣隋使、遣唐使の役割は大きく、律令国家確立にその使命を果たした。

和泉地域は河内国に属していたが、奈良時代には独立して和泉国府が置かれた。泉大津の浜は国府の港すなわち国府津（小津：津とは港のこと）として、現在も高津町にその名を残す。国府と国府津を結ぶ道路沿いに位置すると思われる東雲遺跡からは、掘立柱建物が10数棟検出されている。出土遺物により、それらの建物は奈良時代から鎌倉時代初期までの間に属し、主軸方向が異なることや重複することで何度も建て直されていることが判明している。

豊中遺跡から、平安時代後半に属する方形井戸が１基検出され、井戸内には「田井」「田井殿」と高台部内側あるいは体部外面に墨書きされた内面黒色土器や、灰釉陶器・土鍋・土師器杯が埋められ、井戸の機能は放棄されていた[18]。この井戸以外、市内に於て明確な遺構は存在しない。

白鳳時代創建とされる泉穴師神社、その神宮寺として栄え、崇敬を集めた穴師薬師寺の跡や豊中遺跡からは、平安時代末以降の瓦が出土している。穴師薬師寺は、宝亀年中に小津の浜に流れついた木像の薬師如来を穴師村に堂を建てて安置したのに始まり、平安時代の中頃に大規模となった寺院である。基壇が残り、「穴師堂」銘瓦や宋銭が出土している。豊中遺跡内には「大福寺」の小字名が残り、これは、江戸時代まで存続した寺院である。遺物散布地として、穴師遺跡や虫取遺跡、大園遺跡があげられる。

和泉市府中町には、奈良時代（天平宝字元年）に和泉国府の国衙が置かれたが、その場所、規模など具体的なことは不明である。氏寺として和泉寺、池田寺、坂本寺、信太寺などが存在しており、槇尾寺、松尾寺も奈良時代の寺院である。国分町には福徳寺があり、もと安楽寺といい、平安時代（承和６年）に国分寺として認められている[19]。平安時代後期には末法思想が流布し、埋経が行なわれるようになった。槇尾山施福寺境内から経塚が発掘され、広く世に知られている。

—鎌倉時代・室町時代—

貴族の没落と共に武士の台頭が起こり、遂には源頼朝による鎌倉幕府の樹立で武家政権が始まり、途中の一時期を除いて、興亡を繰り返し武家政権は明治維新まで続くことになる。

泉大津市内に於ける中世の遺跡として、まず東雲遺跡があげられる。平安時代から引き続いて鎌倉初期に至る掘立柱建物で構成される集落遺跡である。古池遺跡から、鎌倉時代の倉庫等の掘立柱建物[20]、板原遺跡でも同時代の掘立柱建物７棟[21]が、又、七ノ坪遺跡からも小溝群とピットが発見されている。豊中遺跡に於ては、土釜（羽釜）や曲物を井筒とした井戸、河原石組の井戸など種々の形態の井戸が数多く発見されている[22]。又、これらの井戸内をはじめ大小ピットや包含層内から、瓦器椀、瓦質羽釜、瓦質練鉢、瓦、土師質小皿などの遺物も多数出土している。しかし、建物跡となると、特に鎌倉時代後半から室町時代にかけては、今のところ１例も確認されていない。地面の削平によるものか、建物の基礎構造が痕跡を残さないものなのかは断言できない。穴

田遺跡は、土釜を積み上げた井戸の発見によって昭和31年に周知された遺跡であるが、その実態は不明である。遺物散布地として、虫取遺跡、穴師遺跡、池上・曽根遺跡などがある。

周辺の遺跡では、和泉市和気遺跡が、屋敷の周囲に堀と柵を巡らす㉘中世豪族の居館跡として興味深いものがある。

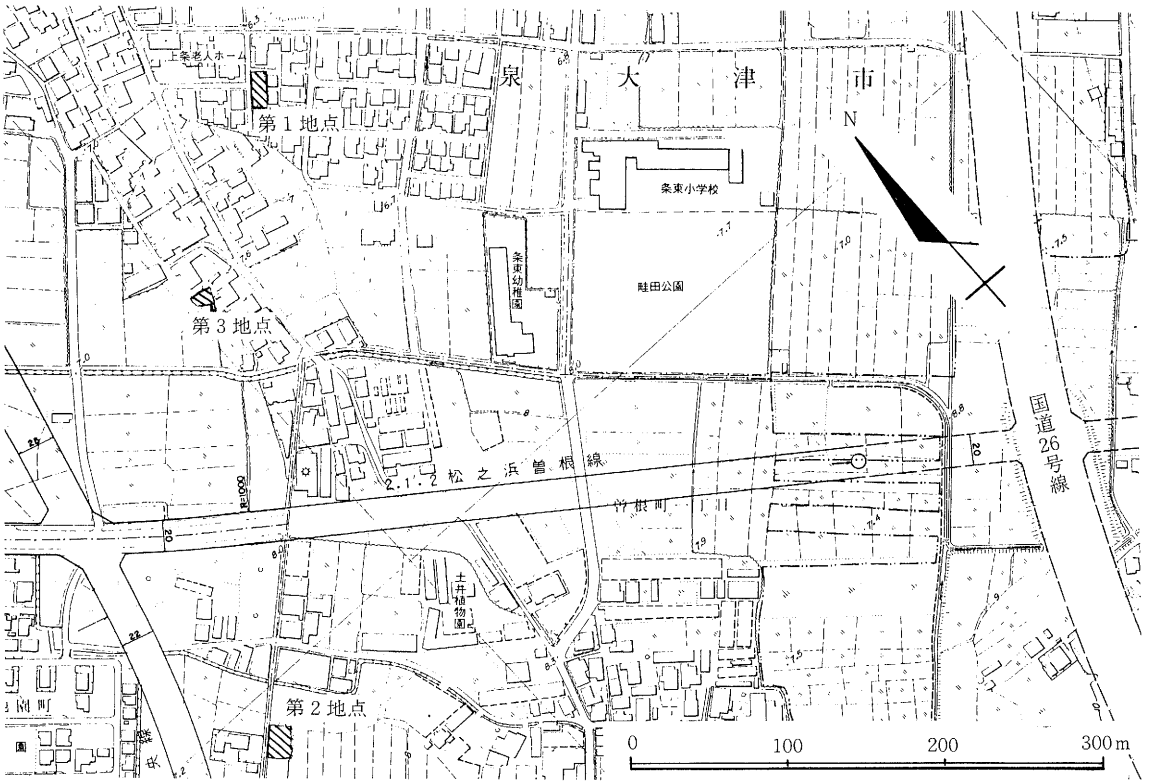
（畑中・坂口）

第３章　発掘調査報告

第１節　池上・曽根遺跡

１　調査に至る経過

池上・曽根遺跡は、和泉市池上町に於て、水田や、その土を使用した土塀に、石器や土器片が見られることで、古く明治時代から有識者には知られていた。又、戦後、市営住宅の建設や府営水道の水道管埋設工事により、緊急調査が行なわれ、住居址の存在から集落跡であることが報告された㉔。しかし本格的な調査が実施されたのは、昭和44年～46年にかけての第２阪和国道建設に先立っての発掘調査からである。その成果は、かねて考えられていた弥生集落の内容をはるかに上まわり、その認識を書き換える必要を生じせしめたものである。それは、弥生時代前期に於ける集落の生成から発展への過程、及び古墳時代集落への移行の様子を明らかにするものである。そ



第２図　池上・曽根遺跡調査地点図

の後の調査により、遺跡は和泉市のみでなく、泉大津市曽根町にまで伸びていることがわかり、その重要性から、昭和51年４月26日、国の史跡に指定され、泉大津市、和泉市により、保存のため徐々に公有地化が進められている。又、その周辺部に於ても、府教育委員会をはじめ両市教育委員会に於て、毎年発掘調査が実施され、遺跡の様子がより明らかにされつつある。

この遺跡内に於て、住宅建設をはじめ種々の工事が行なわれているが、今年度は３ヶ所（第２図）で工事に先立って調査を実施した。

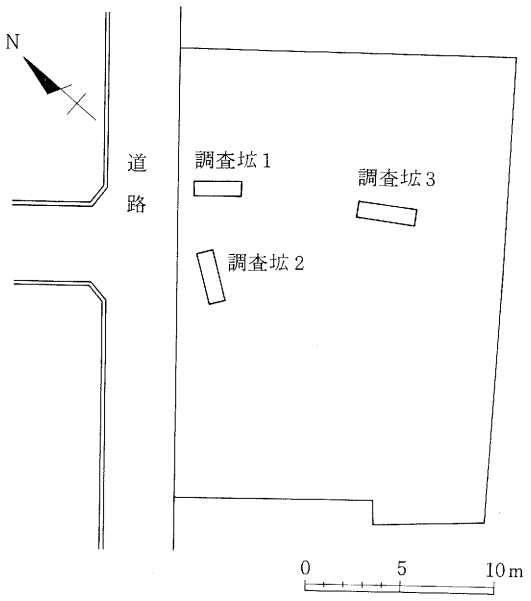
2　調査結果

第　1　地　点（森町2丁目227－17）

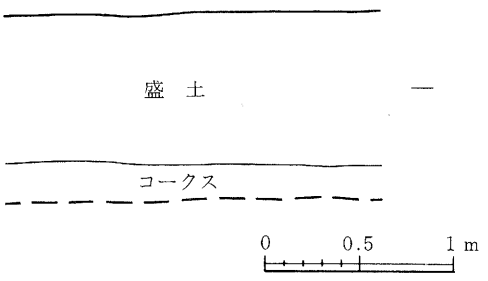
住宅建設に先立つ調査である。敷地面積は413.59㎡である。

当該地は、もと溜池であったが、埋め立てて宅地としたところである。民家が建っていたが、撤去して建て替えるものである。

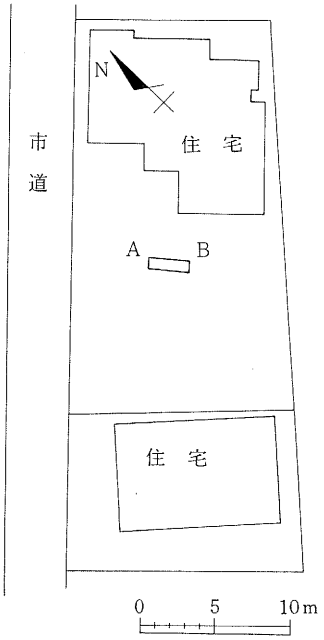
３ヵ所に調査坑を設定して掘削を行なった。いずれも約80cmの盛土で、その下にはコークスがギッシリと埋められており、重機による掘削であったが、非常に堅くてそれ以上の掘削は困難であった。新規建築物の基礎掘削は、盛土内でおさまる設計となっていたため、写真撮影及び断面実測図を作成して、調査は終了した。以上のような結果であるので、遺構・遺物は検出されなかった。



第３図　池上・曽根遺跡第１地点掘削位置図



第４図　池上・曽根遺跡第１地点調査坑断面図



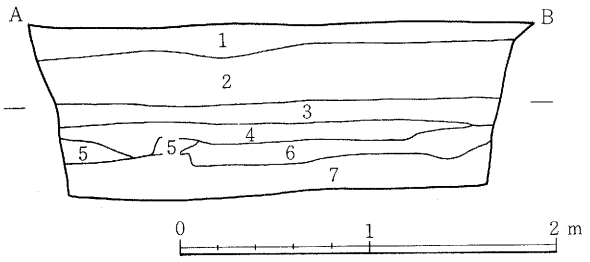
第5図　池上・曽根遺跡
第2地点掘削位置図

第　2　地　点（曽根町１丁目133－3）

住宅建設に先立つ調査である。敷地面積は366.67㎡である。

敷地のほぼ中央部に、幅80cm、深さ95cm、長さ２ｍ70の規模の調査坑を、重機により掘削し、その後人力により北壁を削り、断面観察を実施した。

層序は上部より、盛土約44cm、暗灰色粘質土約10cmで、この層は耕土である。その下は茶灰色粘砂土約10cmで、東部では徐々に薄くなり、見られなくなる。その下で西の方では部分的に灰黄色粘砂土が２ヵ所に見られ、他の部分では暗黄色粘砂土約10cmが存在するが、東の方へ行くに従ってレベルが上がっている。そして、その下に暗灰黄色粘質土が15cm以上見られる。遺構・遺物は検出されず、また付近の既往調査結果とも考え合わせて、調査を終了とした。



調査坑層位名

1．表土（盛土）
2．盛土
3．旧耕土（暗灰色粘質土）
4．茶灰色粘砂土
5．灰黄色粘砂土
6．暗黄色粘砂土（灰色混り）
7．暗灰黄色粘質土

第6図　池上・曽根遺跡第2地点調査坑断面図

第　3　地　点

（森町２丁目77－４・－５，
78－46・－47，190－5・－6）

住宅建設に先立つ調査である。敷地面積は137.29㎡である。

敷地の西寄りに幅１ｍ20、深さ１ｍ10、長さ２ｍ20の規模の調査坑を重機により掘削し、その後人力により、壁面及び床面を削り調査を実施した。

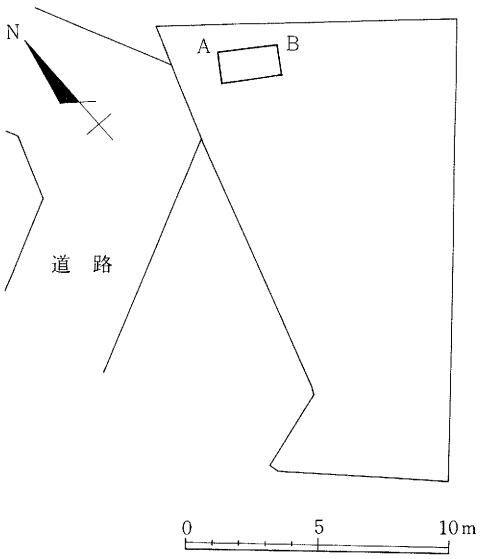
層序は上部より、表土約30cm、黄茶色砂質土20～26cm、暗褐色砂質土15～30cmでその下は礫混り暗褐色粘砂土及び灰茶色砂質土となる。礫混り暗褐色粘砂土は北東方向へ行くに従って薄くなり、それにつれて灰茶色砂質土が厚くなる。黄茶色砂質土と暗褐色砂質土は遺物包含層で、土師器、須恵器が出土したが、遺構は発見できなかった。また、その土師器・須恵器は全て小破片であるため、形態は不明で図示しえない。住宅の基礎掘削は浅く、これ以上調査坑を拡張すること

ができないため写真撮影及び断面実測図を作成し、調査は終了とした。

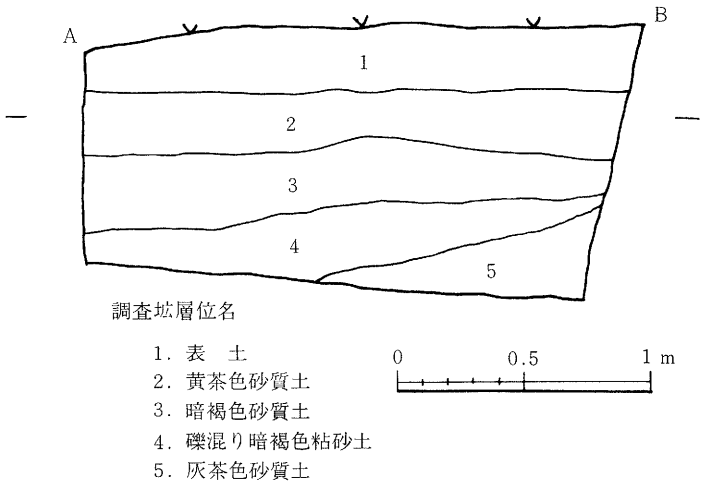
3　まとめ

今回、調査の実施した3ヵ所は、池上・曽根遺跡内の北及び北西部に位置し、弥生時代集落よりかなり離れた部分にあたる。第2地点及び第3地点付近は、古墳時代以降に開発が行なわれたものと思われる。但し、第3地点の西方では府教育委員会による調査が実施され、古墳時代以降の集落が確認されており、当該地点もそれと関連する遺構の検出を期待したが、土層から判断すると、集落からはずれるように思われる。

（坂口）



第7図　池上・曽根遺跡第3地点掘削位置図



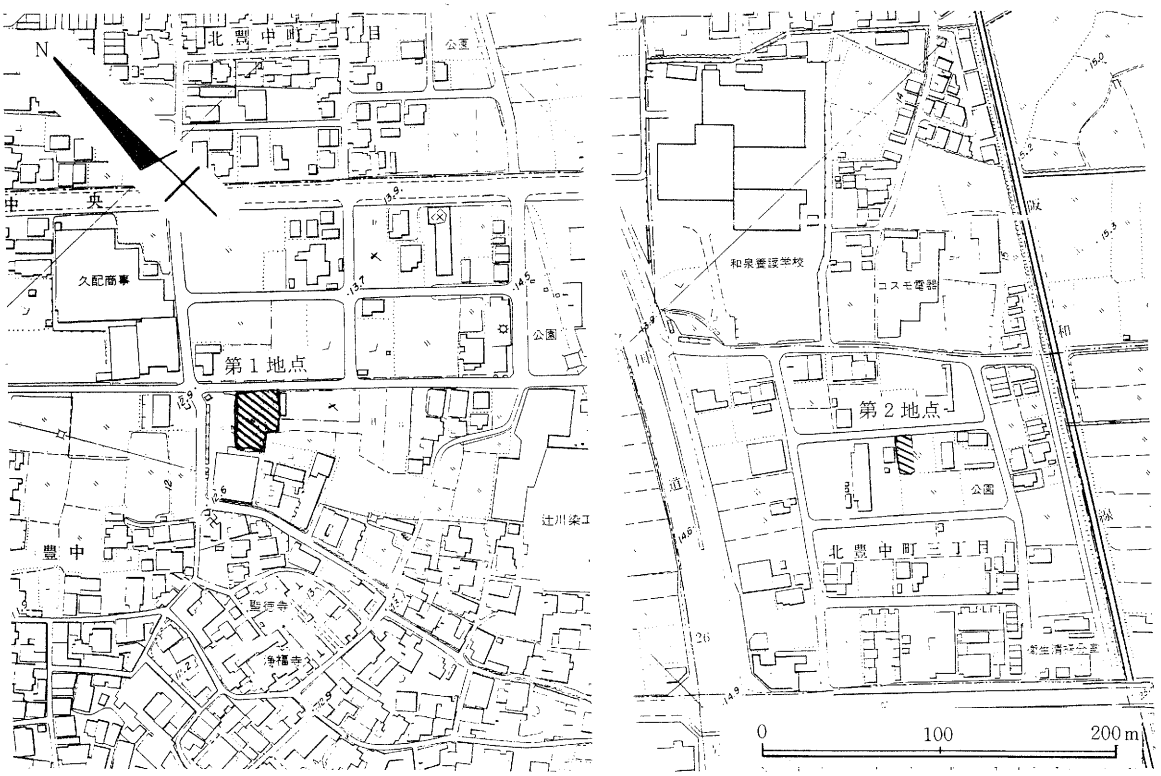
第8図　池上・曽根遺跡第3地点調査坑断面図

第２節　豊中遺跡

１　調査に至る経過

泉大津市豊中・北豊中町及び東豊中町一帯に所在する豊中遺跡は、昭和30年代中頃に発見された遺跡(※)であるが、国道26号線及び土地区画整理事業の完成に伴い、開発行為が増加し、現在までに市内で最も数多くの発掘調査が実施されている。その調査結果の概略は次のとおりである。

まず縄文時代中期後半の土器が、埋積谷の旧河道砂礫層内より発見されている。この層内上部には、土師器や須恵器が含まれており、平安時代位まで存続していたものと思われる。この部分は土地区画整理が実施されるまで溜池であったが、それが築造されたのは、鎌倉時代かもしくはそれに近い時期と考えられる。このほか、古墳時代の集落跡が確認されている。集落は、竪穴住居と掘立柱建物とで構成されており、数棟単位で１グループをなしている。このようなグルー



第９図　豊中遺跡調査地点図

プが数ヵ所にあり、庄内式土器～布留式土器にかけての時期に属するものである。又、平安時代中頃の井戸や、鎌倉時代から室町時代に属する井戸等も検出されている。

今回、この遺跡内に於て倉庫建設が計画され、これに先立ち調査を実施したものである。

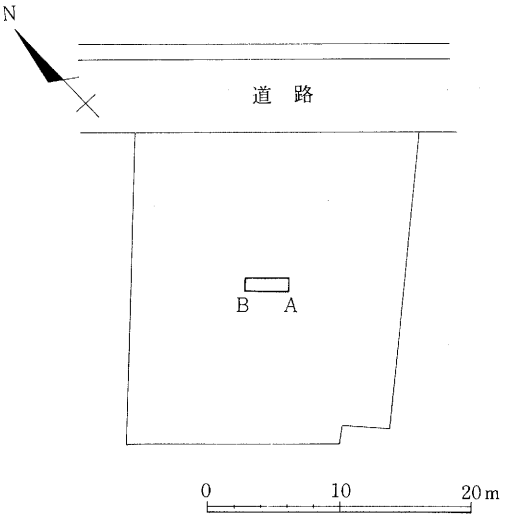
2　調査結果

第　1　地　点　（豊中408－1）

倉庫建設に先立つ調査である。敷地面積は488.52㎡である。

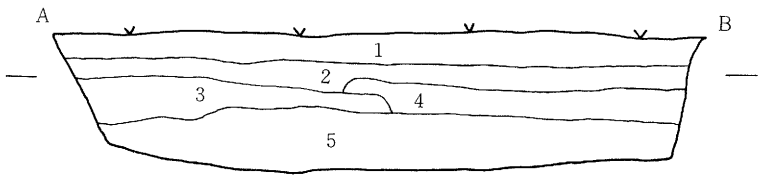
敷地の中央南寄りに、幅約80cm、深さ約70cm、長さ約3m50の規模の調査坑を、重機により掘削し、その後人力により壁面を削り、断面観察を実施した。

層序は上部より、耕土約10cm、灰茶色粘砂約10cmで、その下は東側で黄灰色粘砂が10～26cmの厚さで調査坑のほぼ中央まで見られ、そして、その上からおおいかぶさるように灰色砂質土がはじまり、約20cmの厚さで西の方へ続く。その下は全体に、灰黄色粘砂が30cm以上堆積している。



第10図　豊中遺跡第1地点掘削位置図

遺構・遺物等は検出されず、写真撮影及び断面実測図を作成し、調査を終了とした。



調査坑層位名

1．耕　土
2．灰茶色粘砂
3．黄灰色粘砂
4．灰色砂質粘土
5．灰黄色粘砂

第11図　豊中遺跡第1地点調査坑断面図

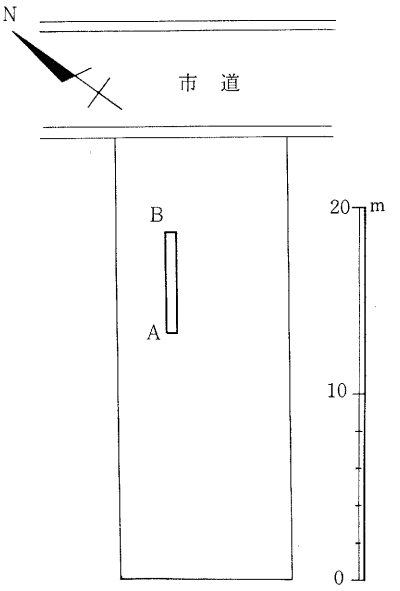
第　2　地　点　（北豊中町３丁目977－８）

倉庫建設に先立つ調査である。敷地面積は216.14㎡である。

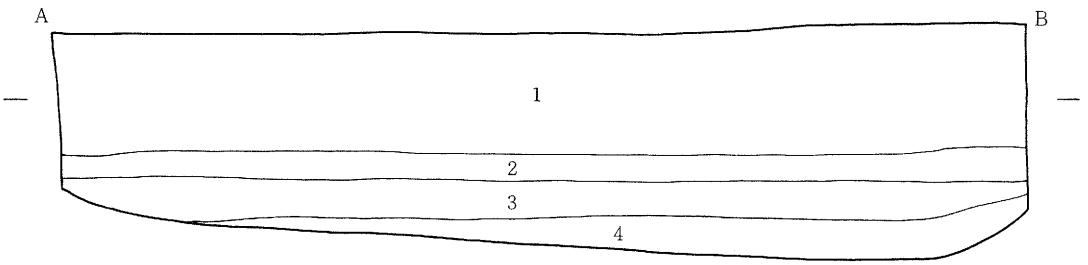
敷地の北寄りに、幅約60cm、深さ約１ｍ25、長さ約５ｍ20の規模の調査坑を重機により掘削し、その後人力により壁面を削り、断面観察を実施した。

層序は上部より盛土約65cm、旧耕土約15cm、灰黄色粘砂土約20cm、そして、その下に茶褐色粘砂土20cm以上となっている。遺構は検出されなかったが、灰黄色粘砂土層より土師器が２片出土した。しかし、そのいずれも小破片であるため図示しえない。

既往調査結果とも合わせて、当該地には遺構は存在しないものと判断し、写真撮影及び断面実測図を作成し、調査は終了とした。



第12図　豊中遺跡第２地点掘削位置図



調査坑層位名

1．盛土
2．旧耕土
3．灰黄色粘質土
4．茶褐色粘砂土

第13図　豊中遺跡第２地点調査坑断面図

3　まとめ

第１地点の東方約80cmの場所に於て、土地区画整理に先立つ調査で、古墳時代庄内期の住居址及び中世の井戸群が発見されており、それらと関連する遺構の存在を予想して、今回の調査を実施したのであるが、残念ながら遺構は検出されなかった。今回の調査地と先述した調査地との間に水路が走り、ほぼその部分から徐々に旧地形はレベルを下げるようであるので、遺跡の範囲を確定するための調査となったと考えられる。第２地点は昭和58年度に調査を実施した部分[28]で、その一部を分筆して倉庫建設の計画があがった。それに先立ち調査を実施したが、前回と同様遺構は検出されなかったので、この場所も遺構の存在しない部分と思われる。

第３節　虫取遺跡

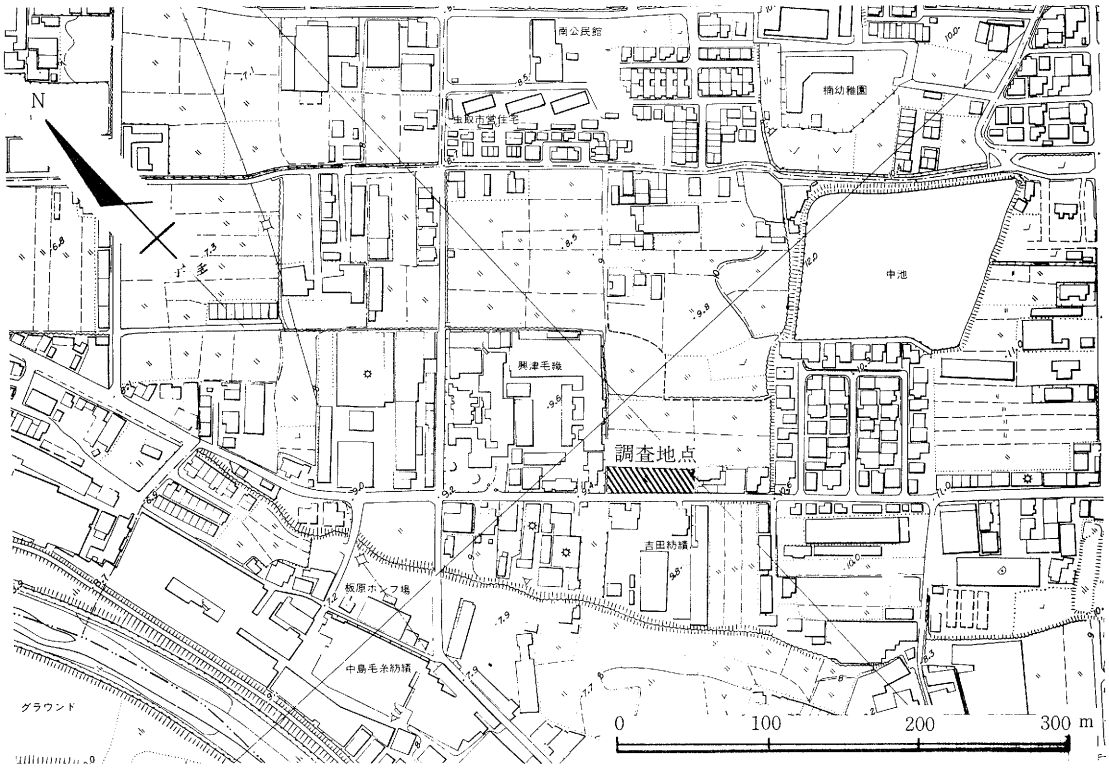
1　調査に至る経過

泉大津市虫取の市立南公民館を中心に半径約800ｍの範囲内で、土師器片や須恵器片が散布しており、虫取遺跡として知られていた。昭和53年、宅地開発に先立って発掘調査が、その費用を原因者負担で府教育委員会によってなされた。初めての本格的な調査によるメスが入れられたのである。その結果、縄文晩期の土器片をはじめ、弥生土器畿内第Ⅰ様式新段階の土器を包含する土坑、６世紀後半及び10世紀後半の掘立柱建物跡等が発見され、弥生時代前期、古墳時代前期、平安時代中頃の集落が存在していたことを明らかにした。

その後、昭和54年に、この遺跡内に所在していた諸瀬池が、小学校（現楠小学校）建設のため埋め立てられることになった。池内の堤防沿いに須恵器片等が散布していたので、市教育委員会で、池内の発掘調査を実施したのであるが、遺構は池底の改修等により削平されたようで残念ながら発見されなかった。

昭和58年には、学校用地となった旧諸瀬池の堤防をコンクリート擁壁にし、その一部を壊して市道が設けられるので、それらの工事に先立って発掘調査を実施した結果、人工と思われる溝が検出され、その溝内から、滋賀里式土器や長原式土器と共伴して[27]、弥生土器第Ⅰ様式新段階の土器が出土し、縄文時代と弥生時代の接点を明らかにする好資料を提供した。

以後、各所に於て、機会ある毎に調査を実施してきたが、目立った遺構の検出を見ていない。今回、遺跡の南部に於て、倉庫建設の計画が起こったので、それに先立ち調査を実施した。



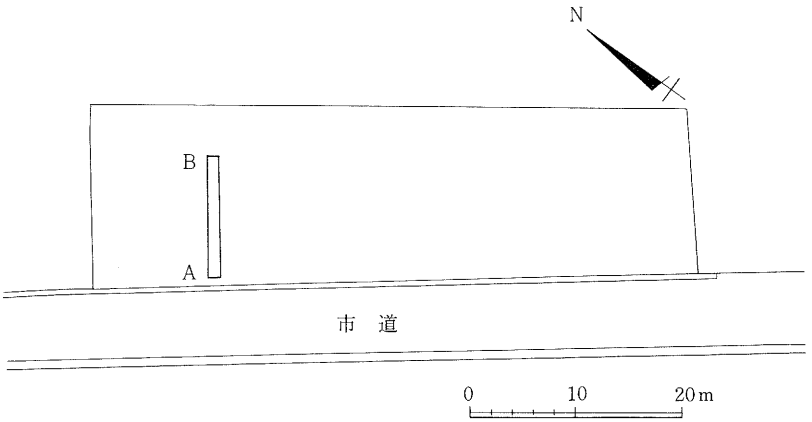
第14図　虫取遺跡調査地点図

2　調査結果　（板原260，260－２）

倉庫建設に先立つ調査である。敷地面積は938.50㎡である。

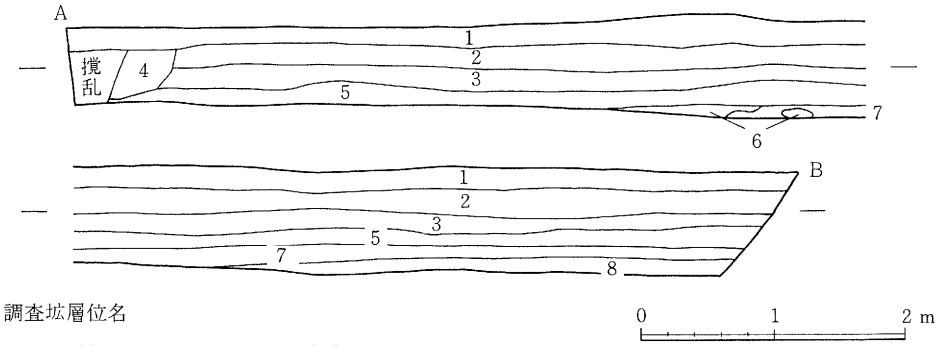
敷地の北西寄りに、幅約１ｍ、深さ約80cm、長さ約11ｍ50の規模の調査坑を重機により掘削し、その後人力により壁面を削り、断面観察を実施した。

層序は上部より耕土約10cm、黄灰色砂質土18～24cm、灰黄色砂質土10～18cm、灰茶色砂質土10～20cm、黄茶色粘質土10～14cmで灰色粗砂が一部混じっている。その下は暗灰茶色粘質土14cm以上となっている。遺構は検出されなかったが、調査坑の北西端で攪乱層及び灰茶色砂質土層が見られた。攪乱は近世に至る溝の跡で、暗灰茶色砂質土は、それに関連するやや古い時期の層と思われる。



第15図　虫取遺跡掘削位置図

遺物としては、灰黄色砂質土層より瓦器片、灰黄色砂質土層と灰茶色砂質土層の間より土師器片及び瓦器片、灰茶色砂質土層と黄茶色粘質土層の間より同じく土師器片と瓦器片が出土したがいずれも小破片であるため図示しえない。



調査坑層位名

1．耕土　　4．暗灰茶色砂質土　　7．黄茶色粘質土
2．黄灰色砂質土　　5．灰茶色砂質土　　8．暗灰茶色粘質土
3．灰黄色砂質土　　6．灰色粗砂

第16図　虫取遺跡調査坑断面図

3　まとめ

今回、調査を実施した場所は虫取遺跡の南の限界を示す箇所で、遺物の包含層は見られるものの、遺構は存在しないと思われる。当該地に接する市道より南西側では、わずかの距離を於て大きく段差をなして低くなり、大津川の氾濫原となっている。当該地は、段丘上に位置を占めるのであるが、弥生時代・古墳時代・平安時代の人々が集落を形成していたのは、これより北へ約300ｍの地点である。当然今回の調査地付近は、彼らの行動範囲の中にはいっていたものと考えられる。恐らくは生産の場である田畑用地として利用されていたのであろう。

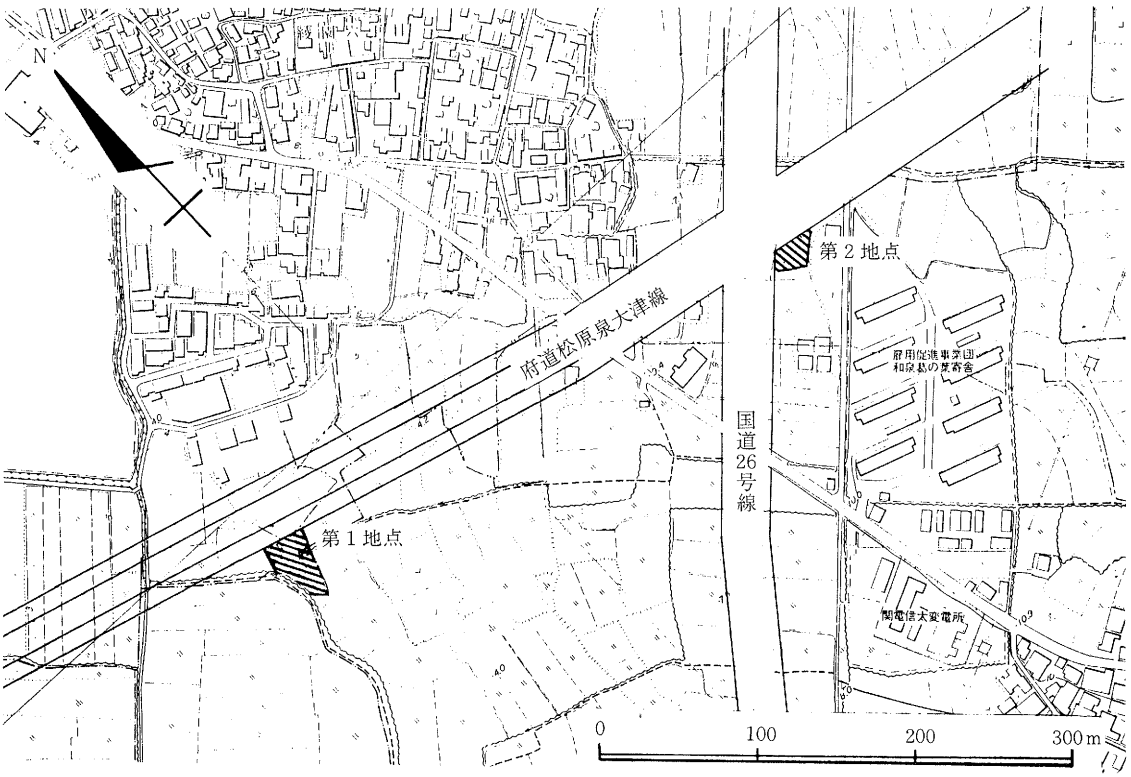
（坂口）

第4節　大園遺跡

1　調査に至る経過

大園遺跡は、高石市西取石・綾園を中心に和泉市葛ノ葉、泉大津市綾井にまたがる大集落遺跡である。この遺跡も豊中遺跡と同様、第２阪和国道建設に先立つ調査で高石市域に於て発見されたものであり、その成果は次のとおりである。円墳状の高まりを見せる裾部から、円筒埴輪、朝顔形埴輪や人物埴輪が発見され㉘、その後の調査㉙で削平された帆立貝式古墳であることが判明し、「大園古墳」と名付けられた。又、塼仏も他の場所より出土し、古代寺院の存在も予想させた。更に、黄灰色土の所謂「地山」から旧石器が出土したことが、その遺跡の時代的幅広さを物語っている。その後の府教育委員会、大園遺跡調査会、高石市教育委員会等の調査により、遺跡の範囲は更に広がり、和泉市、泉大津市まで伸び、遺構が存在する段丘及び段丘斜面上には、５世紀後半及び６世紀後半の掘立柱建物が120棟以上群をなしており、その屋や倉の構成から古墳時代集落の構造を解明させる数少ない遺跡の一つとなっている。以上の他にも奈良・平安・室町の各時代の掘立柱建物も検出されており、大複合遺跡として存在しているが、その成果の膨大さには驚かされるものである。

今回、この遺跡内に於て、３ヵ所で調査を実施したが、第３地点の調査は、現在整理中であるので、まとまり次第報告することとし、２ヵ所（第17図）の調査結果を記述する。



第17図　大園遺跡調査地点図

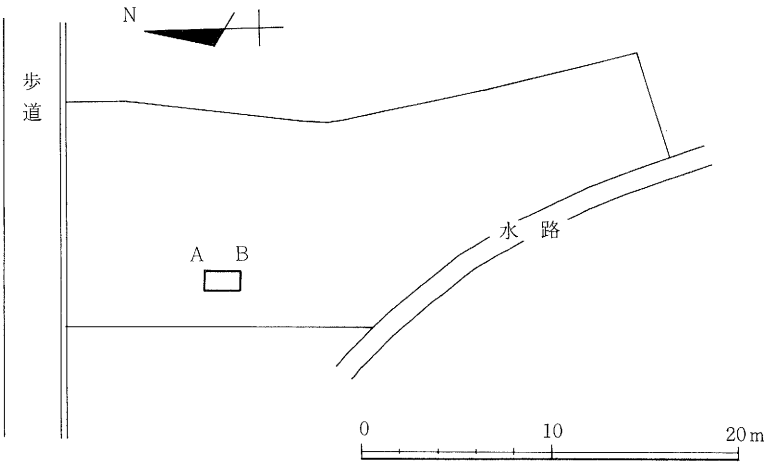
2　調査結果

第　1　地　点

（綾井22－1・－2
23，75）

倉庫建設に先立つ調査である。敷地面積は297.69㎡である。

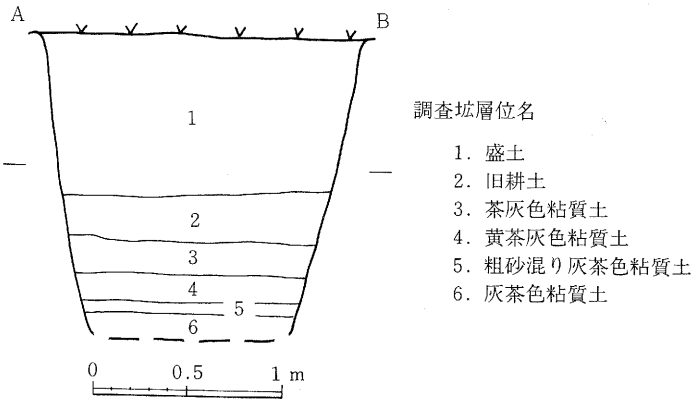
敷地の北寄りに、幅約１ｍ10、深さ約１ｍ65、長さ約２ｍ50の規模の調査坑を重機により掘削し、その後人力により壁面を削り、断



第18図　大園遺跡第１地点掘削位置図

面観察を実施した。

層序は、上部より盛土約80cm、旧耕土約20～30cm、茶灰色粘質土約20cm、黄茶灰色粘質土15cm、粗砂混り灰茶色粘質土約６cm、灰茶色粘質土10cm以上となる。



第19図　大園遺跡第１地点調査坑断面図

黄茶灰色粘質土層より、角が磨耗した土師器片が一片出土したが、小破片のため、時期・器種は不明であり、図示できるものではない。倉庫の基礎掘削は盛土内でおさまる設計であるので、写真撮影及び断面実測図を作成して、調査を終了とした。

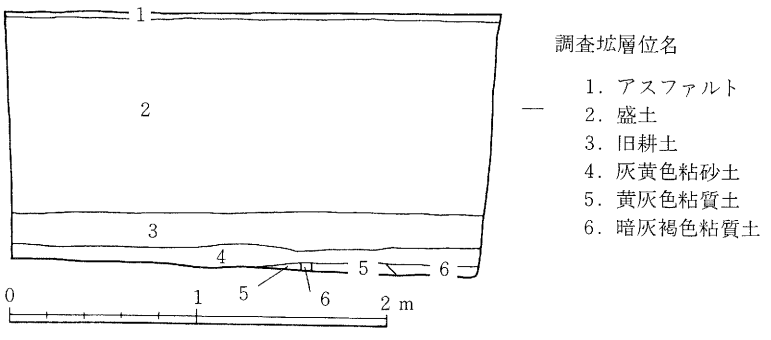
第　２　地　点　（綾井58－11）

店舗建設に先立つ調査である。敷地面積は329.02㎡である。

敷地の西寄りに、幅約80cm、深さ約１ｍ30、長さ約２ｍ50の規模の調査坑を、重機により掘削し、その後人力により床面及び壁面を削り、調査を実施した。

層序は上部よりアスファルト約３cm、盛土約１ｍ４、旧耕土約20cm、灰黄色粘砂土約６～10cm、黄灰色粘質土となる。この黄灰色粘質土上面が遺構面であり、暗灰褐色粘質土の埋まったピットが確認された。又、須恵器片や土師器片も発見されたが、いずれも図示し得るものではなかった。

当該地は国道26号線（旧第２阪和国道）と府道松原泉大津線との交差する南東側に位置し、この２路線は府教育委員会によって発掘調査がなされ、多大の成果を得て報告書も刊



第20図　大園遺跡第２地点調査坑断面図

行されている[30]。

本地点に於て店舗建設の計画が起こり、届出がなされた時点で、遺構が存在することは予想されたのであるが、既に１ｍ以上の盛土にアスファルトが敷かれていたので、調査期間と土量との問題から全面発掘はせず、基礎掘削に於ける遺構の破壊の有無を調べるため今回の調査を実施した。その結果、基礎掘削は遺構面にまで達しないということであるため、調査は終了した。

3　まとめ

第２地点は５世紀後半及び６世紀後半の集落跡が存在する段丘上にあたり、その中心部よりややはずれるものの、遺構の存在が明らかとなった。これらの遺構は段丘斜面上に於ても確認されているが、第１地点は、この斜面を下りきった部分にあたり、地理的にみて、遺構の存在は予想されなかった。しかし念のためということで発掘調査を実施したのであるが、予想にたがわず、遺構は検出されなかった。付近の調査結果でも同様の結果が得られている。

（坂口）

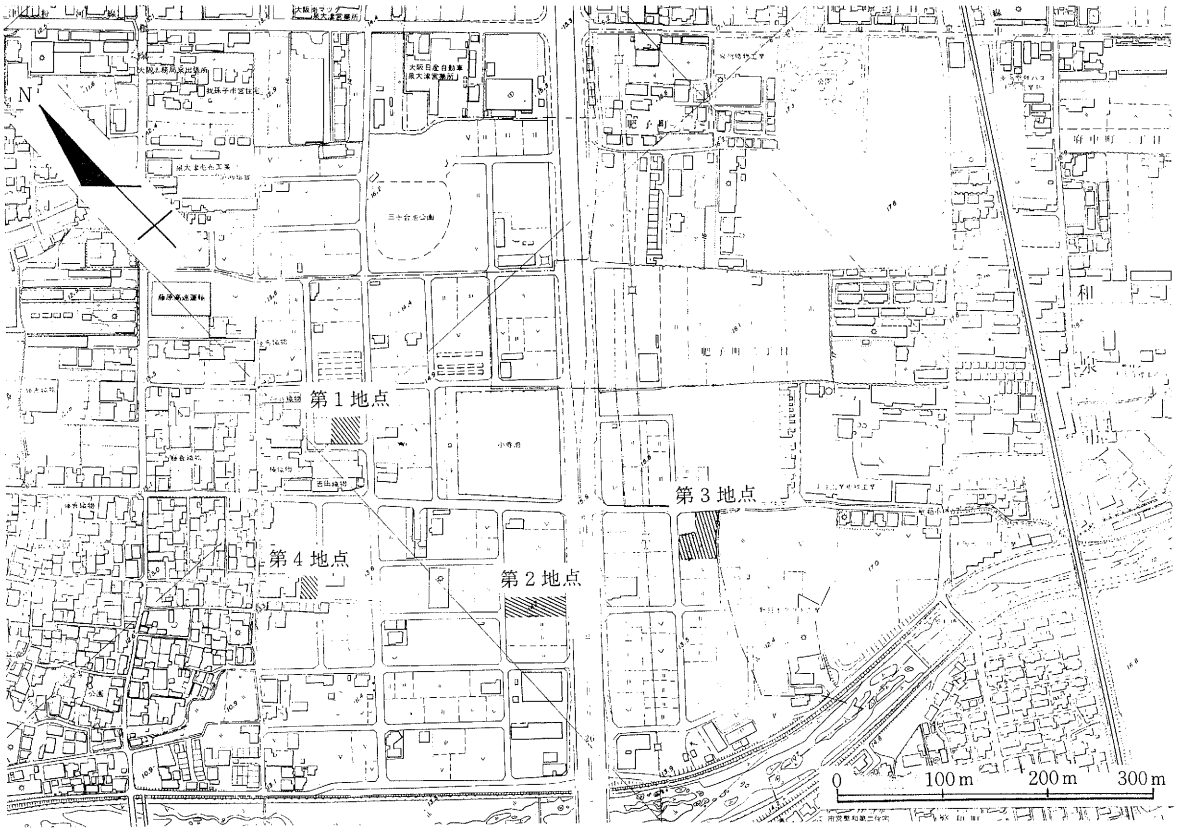
第５節　板原遺跡

1　調査に至る経過

泉大津市板原の水田地帯は、市の南部に位置し、槇尾川・松尾川の氾濫原を隔てて忠岡町と、又、東側は和泉市肥子町と接している。昭和50年代の中頃までは、目立った道路もなく、条里制施行の跡を示す水田が存在するのみであった。ここに於て、土地区画整理がなされ、第２阪和国道が建設されると、整然とした街路が縦横に走り、それに沿って新しく開発が行なわれようとしている。これらの工事に先立ち道路部分に於て発掘調査が実施されたが、特に第２阪和国道部分に於ては、多くの成果[31]を得ることができた。

昭和52年に、豊中古池遺跡調査会の試掘調査により、第２阪和国道部分より、縄文土器、須恵器、瓦器、磁器等の破片が出土し、各々の時代に属する遺構の存在が予想された。それにより、昭和54年度、府教育委員会が道路部分を全面調査した結果、縄文時代後期の自然流路及び土器、晩器の溝状遺構、ピット等と土器が発見された。弥生時代の遺構は検出されなかったが、僅かな遺物が出土している。古墳時代前期の遺構や井戸、平安時代の建物のほか、鎌倉時代には、小規模な建物群が存在するなど、中世にまで及ぶ複合遺跡であることが判明した。

今回、この遺跡内４ヵ所（第21図）に於て事務所・倉庫等の計画が起こり、事前に協議の結果、工事に先立ち調査を実施したものである。



第21図　板原遺跡調査地点図

2　調査結果

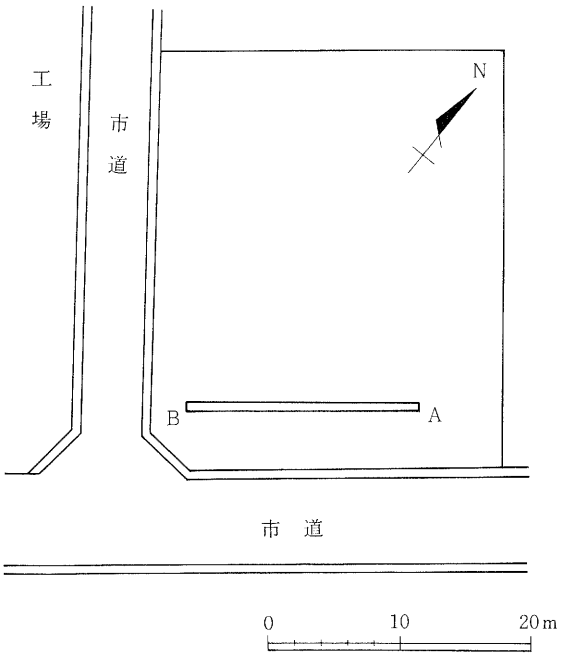
第　1　地　点　（板原84）

倉庫建設に先立つ調査である。敷地面積は825㎡である。

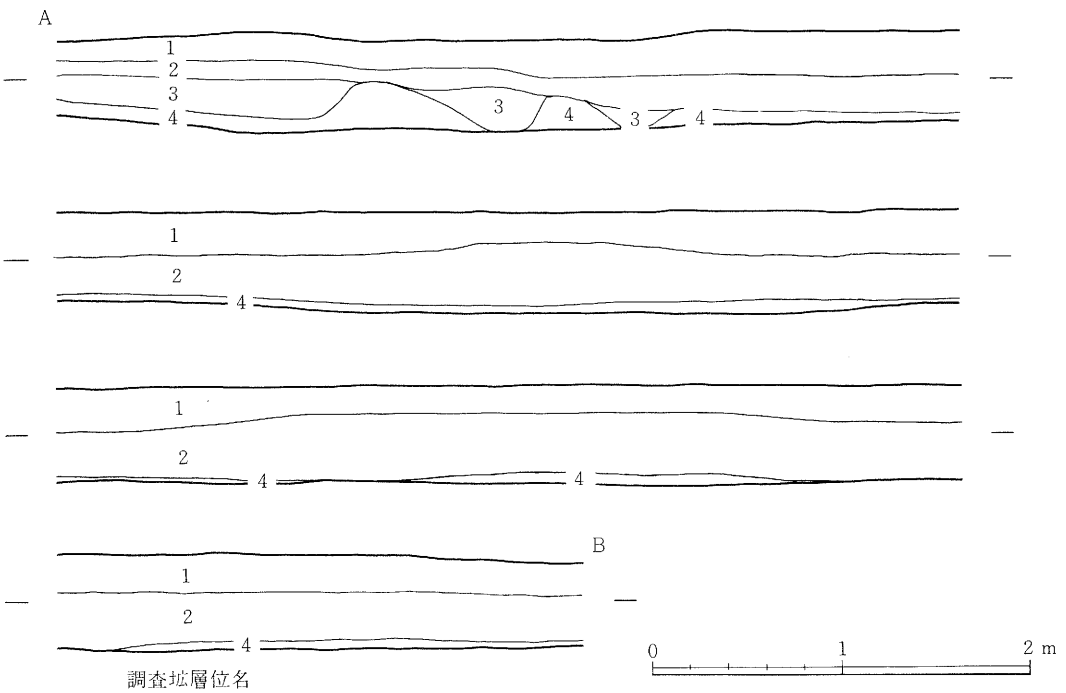
敷地の南東部に、幅約70cm、深さ約50cm、長さ約17ｍ20の規模の調査坑を重機により掘削し、その後人力により壁面を削り、断面観察を実施した。

層序は上部より、耕土15～25cm、床土10～30cmで、この床土は土地区画整理時に貼ったものである。その下は、北部分で灰黄色粗砂混り砂質土が３ヵ所に見られるほかは、茶灰色粗砂となっている。断面観察の結果、土地区画整理時に、床土もしくは茶灰色粗砂層が削平されているものと思われた。

遺構・遺物等は確認されなかったので、写真撮影及び断面実測図を作成して、調査は終了とした。



第22図　板原遺跡第１地点掘削位置図



調査坑層位名

1．耕土　　3．灰黄色粗砂混り砂質土
2．床土　　4．茶灰色粗砂

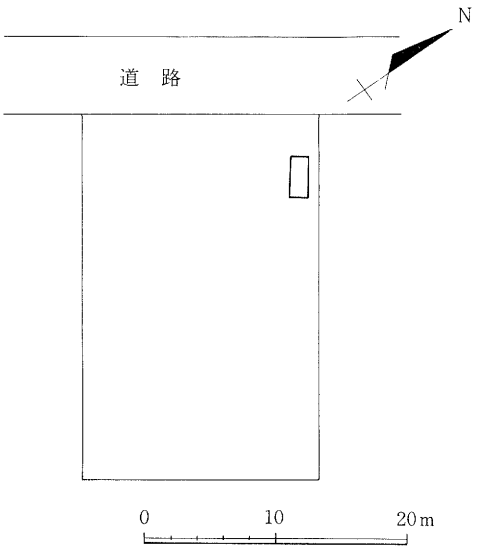
第23図　板原遺跡第１地点調査坑断面図

第　2　地　点　（板原25）

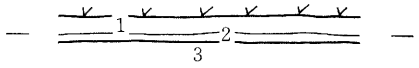
倉庫建設に先立つ調査である。敷地面積は502m²である。

幅約１ｍ40、深さ約14cm、長さ約３ｍ10の規模の調査坑を掘削して、床面を調査した。

層序は上部より、耕土約10cm、床土約４cm、灰黄色粘質土となる。床土は土地区画整理時に貼られたものである。灰黄色粘質土面が遺構面であると考えられるので、調査を行なったが、遺構等は確認できなかった。そこで、部分的に約50cm掘り下げたが、層序の変化は見られなかった。又、遺物の検出もなかったので、写真撮影及び断面実測図を作成して調査は終了とした。

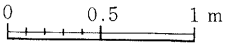


第24図　板原遺跡第２地点掘削位置図



調査坑層位名

1．耕土
2．土地区画整理時造成床土
3．灰黄色粘質土



第25図　板原遺跡第２地点調査坑断面図

第　3　地　点　（板原５，６，７，８，10－１）

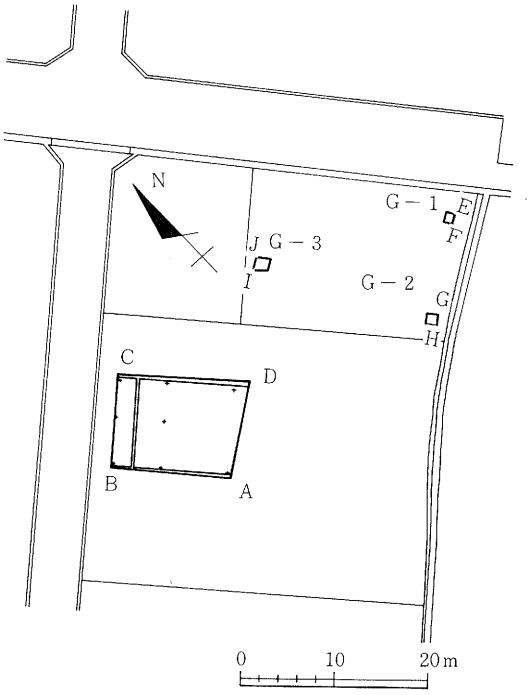
遺　構

宅地造成工事に先立つ調査である。土地面積は2995m²である。

宅地造成の為、盛土工事を実施したい旨、土地所有者より市教育委員会へ相談があった。近くを通る第２阪和国道の建設に先立つ府教育委員会の調査では建物跡が検出されているので、当該地に於ても遺構の存在が予想された。よって造成工事に先立って発掘調査が必要であると思われ、協議の結果今回の調査となった。

調査は、約10ｍ×11ｍの規模の調査区を設定して、重機により耕土約８cm、床土17～20cmを除去する。この床土は土地区画整理時に貼られたものである。その後は人力による掘削を行なった。

遺構面と思われる層は床土除去後に見られ、海抜は15m40前後である。但し、土地区画整理時に若干削平された可能性もある。この上面からは遺構等は検出されなかったが、北西部で土質の変化が見られた。又、北西壁に沿って掘ったトレンチに溝状の土層が見られたので、更に調査範囲を幅約２ｍ拡張した。



第26図　板原遺跡第３地点掘削位置図

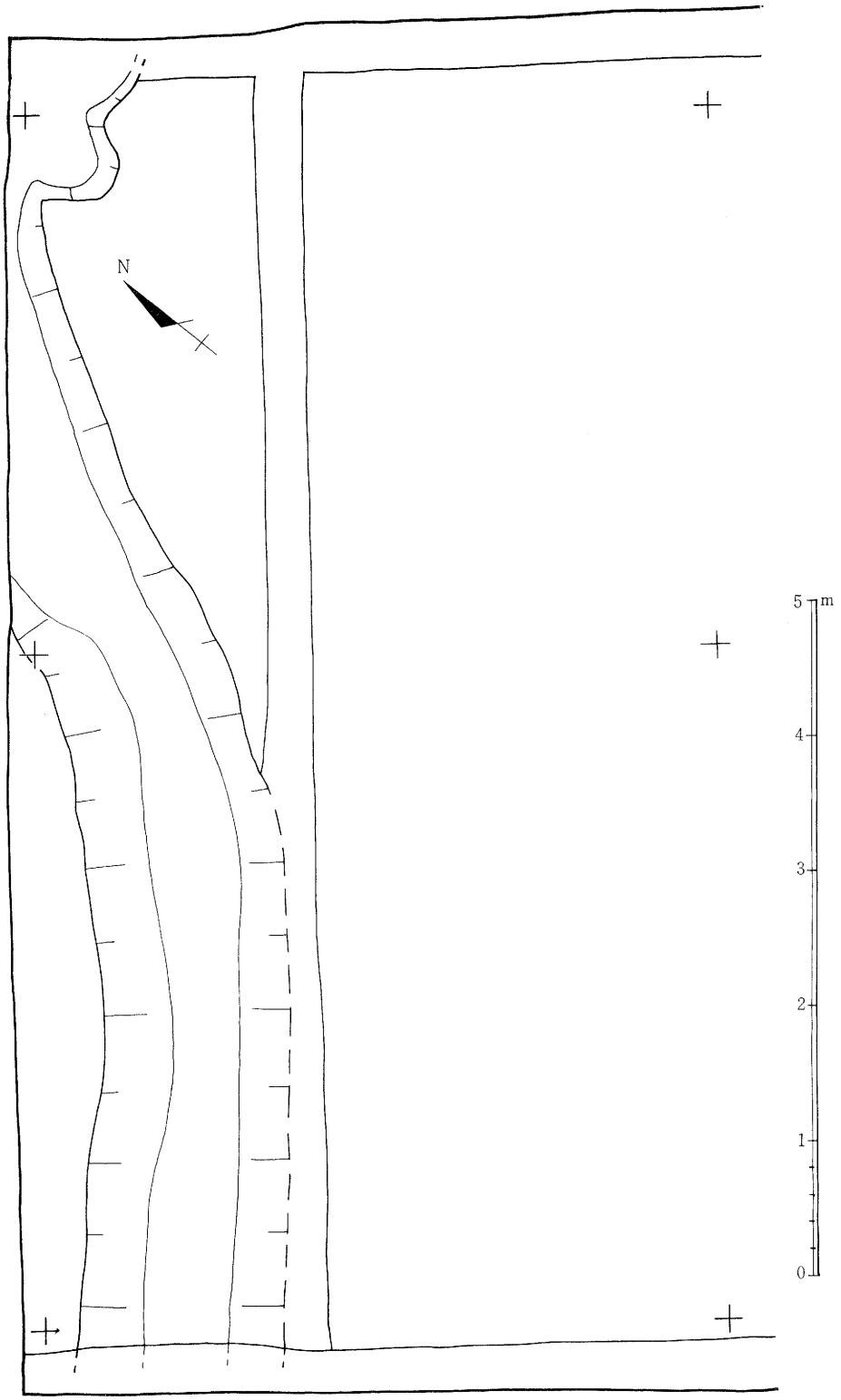
溝　幅約１ｍ30、深さ30～40cm、流路方向は、南西から北東に向かい、途中で北方向に変わるものである。この溝は最終の形態の規模で、堆積土は灰色粘質土及び暗灰色粘質土である。最盛期の溝は、調査区域外に及ぶため規模は不明である。堆積土中より土師器甕（１）が出土したが、溝の年代を決定させる根拠とはなりえず、時期は不明である。あえて言うならば、堆積土より判断して鎌倉時代以降であろう。遺物としては他に床土中より須恵器、瓦器（２）、陶器（３）などの破片が出土した。

以上のような結果であったので、東側の隣接地にグリッドを３ヶ所設けて、断面観察を行なった。それは第29図に図示するとおりである。小規模のグリッドではあるが、遺構は検出できなかった。

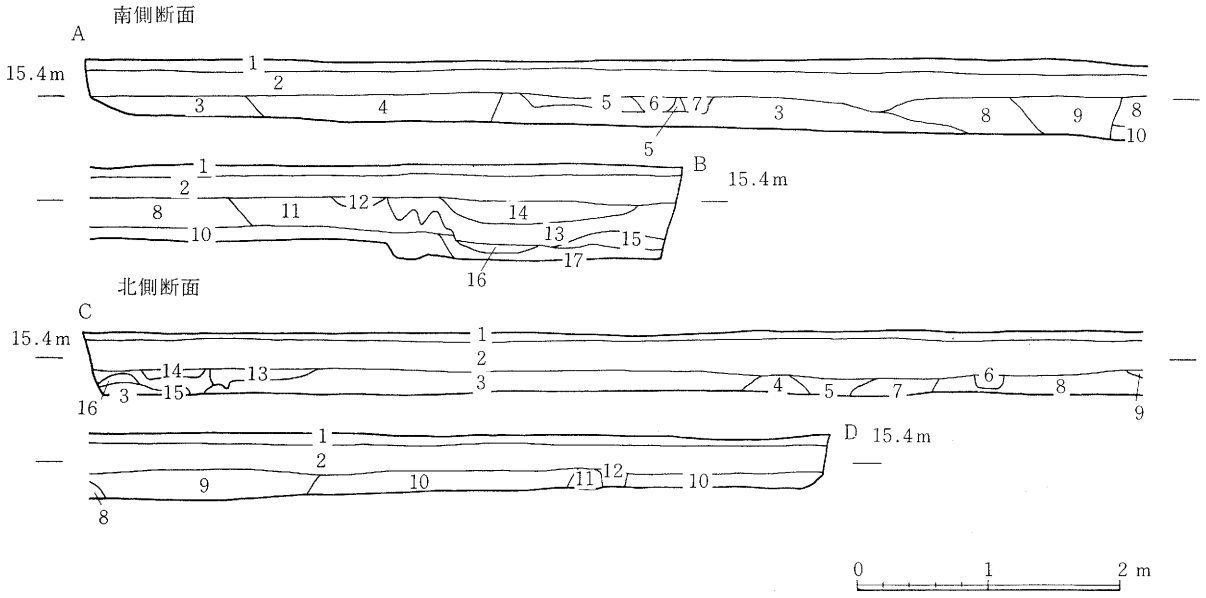
（坂口）

遺　物

出土遺物は、土師器、須恵器、瓦器、陶器などである。古墳時代から中世以降にかけてのものである。しかし出土数は極めて少なく、すべて細片で図示できるのは２点のみである。詳細は遺物観察表に示した。



第27図　板原遺跡第 3 地点遺構図



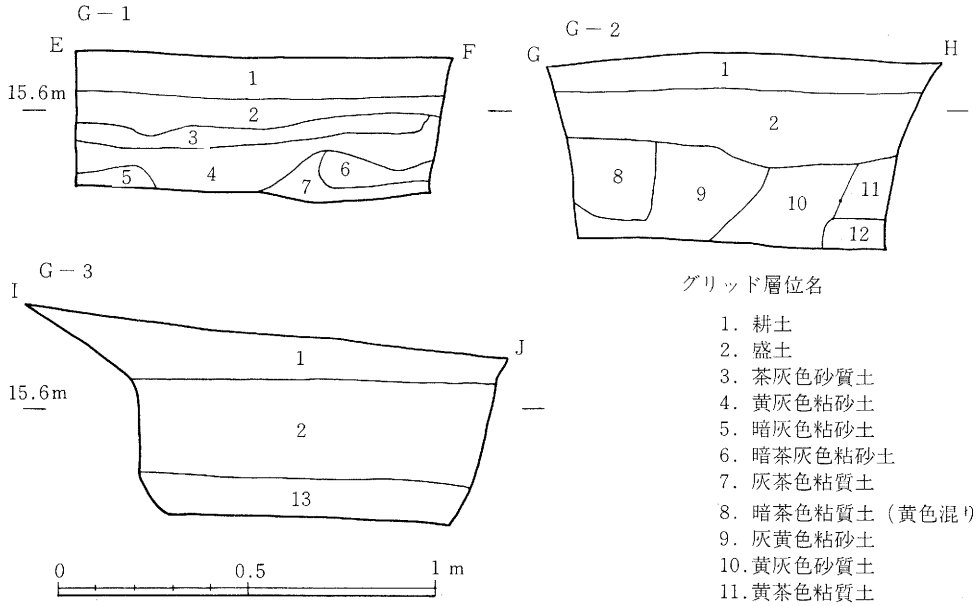
南側断面層位名

1. 耕土
2. 床土
3. 黄茶色礫混り砂質土
4. 暗灰茶色砂礫
5. 灰茶色粘質土
6. 茶灰色粘質土
7. 黄灰色粘砂土
8. 灰茶色粘砂土
9. 茶灰色粘砂土
10. 灰濃茶色粘砂土
11. 黄灰色粘質土
12. 暗茶灰色粘質土
13. 灰色粘質土（茶色混り）
14. 暗灰色粘質土
15. 灰色砂
16. 淡灰色粘質土（茶色混り）
17. 淡灰茶色粘質土

北側断面層位名

1. 耕土
2. 床土
3. 灰茶色粘質土
4. 暗茶灰色粘砂土
5. 茶灰色粘質土
6. 灰茶色粘砂土
7. 灰色礫混り砂
8. 茶灰色礫混り砂質土
9. 灰茶色礫混り砂質土
10. 暗灰茶色砂礫
11. 暗茶色砂
12. 黄灰色礫混り砂質土
13. 黄灰色粘砂土
14. 暗灰色粘質土
15. 灰色粘質土
16. 黄灰色粘質土

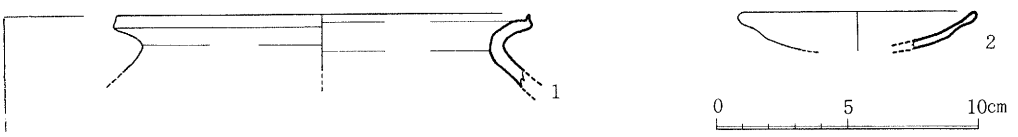
第28図　板原遺跡第３地点調査坑断面図



グリッド層位名

1. 耕土
2. 盛土
3. 茶灰色砂質土
4. 黄灰色粘砂土
5. 暗灰色粘砂土
6. 暗茶灰色粘砂土
7. 灰茶色粘質土
8. 暗茶色粘質土（黄色混り）
9. 灰黄色粘砂土
10. 黄灰色砂質土
11. 黄茶色粘質土
12. 暗茶灰色砂
13. 灰茶色礫混り砂

第29図　板原遺跡第３地点グリッド断面図



第30図　板原遺跡第３地点出土遺物

土師器甕（１）

「く」の字状に屈折する頸部で、口縁部は外反している。そして口縁端部は上につまみ上げるように調整されており、庄内式に分類されるものである。

瓦器小皿（２）

底部がやや丸味を帯びており、口縁部は緩かなカーブを描きながら立ち上り、底部と口縁部との境にはわずかに稜をもっている。

陶　　器（３）

椀の胴部と思われる細片である。精製土を用いて硬く焼かれており、内面に施釉されている。また、釉色は暗灰緑色である。

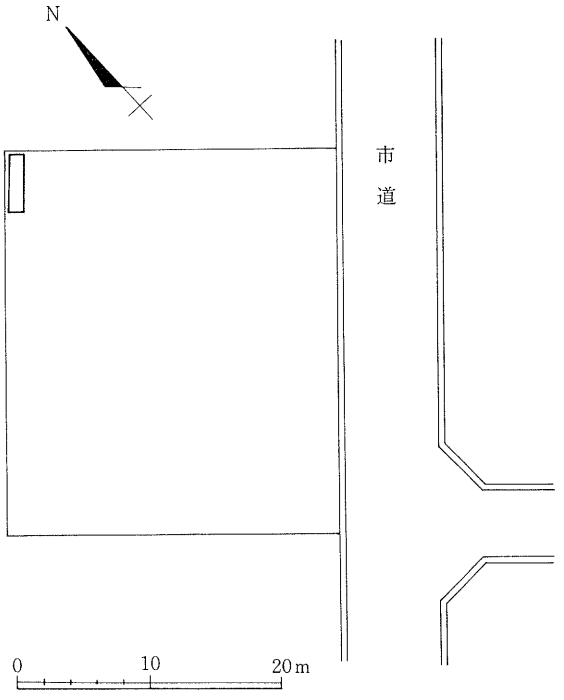
（池田）

第　４　地　点　（板原41）

倉庫建設に先立つ調査である。敷地面積は731㎡である。

敷地の北寄りに、幅約１ｍ10、深さ約40cm、長さ約４ｍ50の規模の調査坑を掘削し、壁面及び床面の観察を行なった。

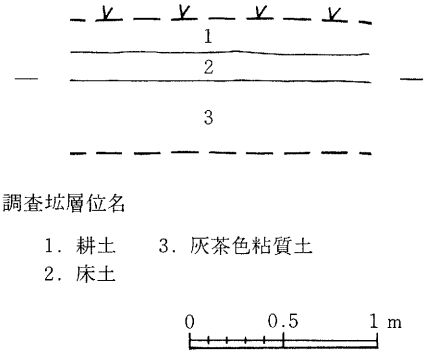
層序は上部より、耕土約20cm、床土約10cmで灰茶色粘質土となる。この灰茶色粘質土面は遺構面の可能性があるので、精査したが、遺構は検出されず、更に30cm掘り下げたが、層序に変化はなく、遺物も発見されなかった。第２地点とよく似た様相を呈しているので、写真撮影及



第31図　板原遺跡第４地点掘削位置図

び断面実測図を作成して、調査は終了とした。

3　まとめ



第32図　板原遺跡第４地点調査坑断面図

第１・第２・第４地点に於て、遺構・遺物等の検出はなく、特に第１・第４地点は、板原遺跡の西の限界を示すものと思われる。又、第３地点は同じく板原遺跡の南の限界を示すものであろう。第２阪和国道内で建物跡等の検出結果と考えあわすと、その分布する範囲はあまり広くないものと考えられる。しかし今回行なった調査、特に第１・第２・第４地点は、建設工事の基礎掘削が浅いということもあって、調査範囲を小規模にとどめたので、結果的に遺構にあたらなかったという可能性も充分にある。今後も精力的な調査を続ける必要があろう。

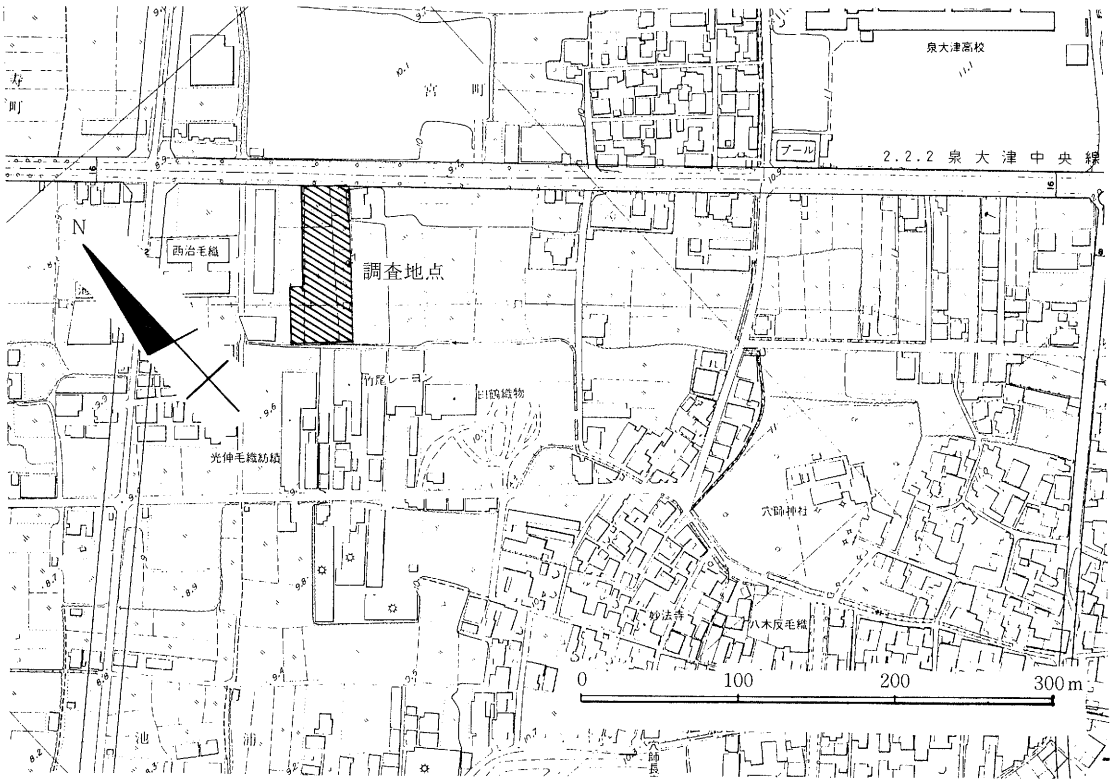
（坂口）

第６節　池浦遺跡

1　調査に至る経過

弥生時代前期中段階の集落として、池浦遺跡が知られている[32]が、存続期間は短かく、前期の間に衰退してしまうようである。その規模もさほど大きくはなく、現在の泉大津市立病院東側から東へ500ｍの範囲にかけてのみ、その時期の遺構・遺物が検出される。しかし人々が生活を営んだ住居の跡は、今のところ発見されておらず、集落を画すると思われる人工のＶ字溝及び、断定はできないが、柱穴と思われるピットが確認されているのみである。その次の遺物は古墳時代で、既往の調査によると、砂利層や低湿地が確認されている。又、付近の水田には、須恵器や土師器の破片が散布し、その範囲は凡そ800ｍ×400ｍと広範囲にわたる。

今回、調査を実施した場所は、上記の中心部より大きく離れた、遺跡南東部の範囲推定線上にあたる部分である。この地に於て工場建設の計画がなされたので、市教育委員会では、範囲を確認する上で、調査の必要があると判断し、届出者と協議の結果、今回の調査を実施した次第である。



第33図　池浦遺跡調査地点図

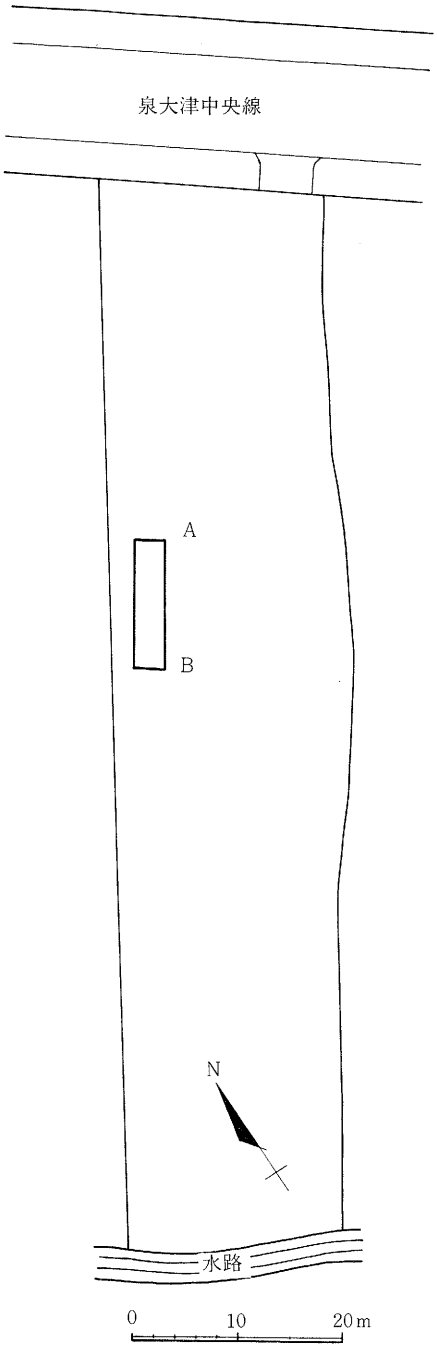
2　調査結果（池浦町５丁目335－１，336，337，338）

工場及び倉庫建設に先立つ調査である。敷地面積は2203㎡である。

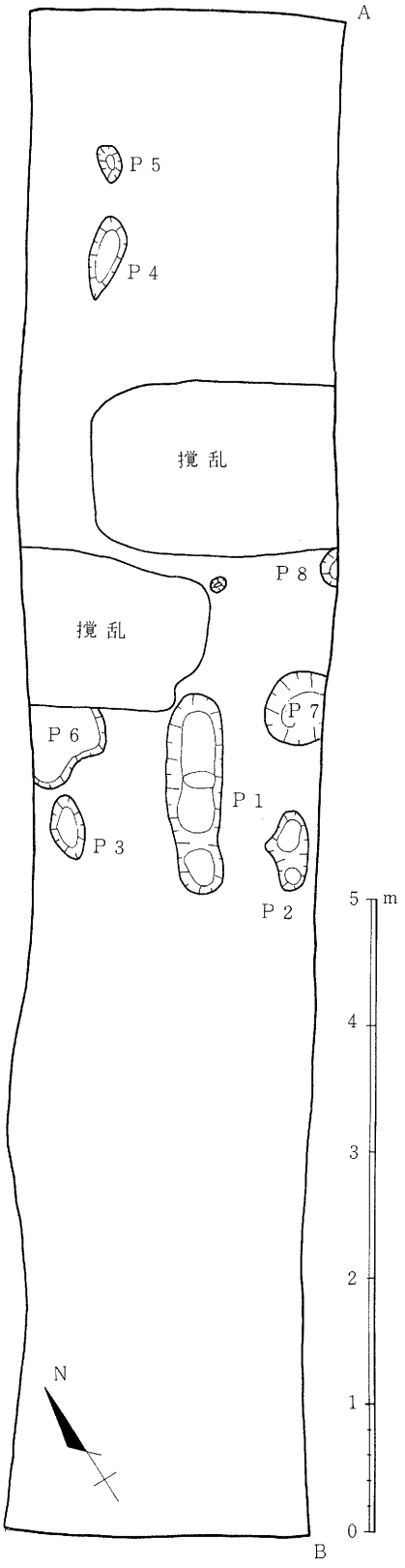
当該地は池浦遺跡の範囲の南東部際にあるため、遺構存在の有無を確認する目的で、今回の調査を実施した。敷地内の中央部西寄りの位置に、幅２ｍ50、長さ約12ｍの範囲の調査坑を設定し、重機により、盛土約40cm、旧耕土約10cmを除去した。その後人力により掘削を行なった。調査坑の東壁断面の観察の結果は次のとおりである（第34図）。

上部より盛土約40cm、旧耕土約10～14cm、灰色砂質土約８cmで、この層は南へ行くにしたがって薄くなり、やがて見られなくなってしまう。但し北側より４～５ｍ50の間で14cm以上の厚さになり、一部では暗灰色に変色している。その下は、灰茶色土４～10cm、灰黄色土10cm以上で、南側ではこの２層の間に灰色粘質土約８cmが見られる。同じく南側で灰黄色土の下には、暗灰色粘質土が確認された。遺構面は、灰茶色土の上面である。

検出した遺構は、溝状で浅く、形も楕円形に近いものが多い。堆積土は、Ｐ１～Ｐ６・Ｐ８に



第34図　池浦遺跡掘削位置図

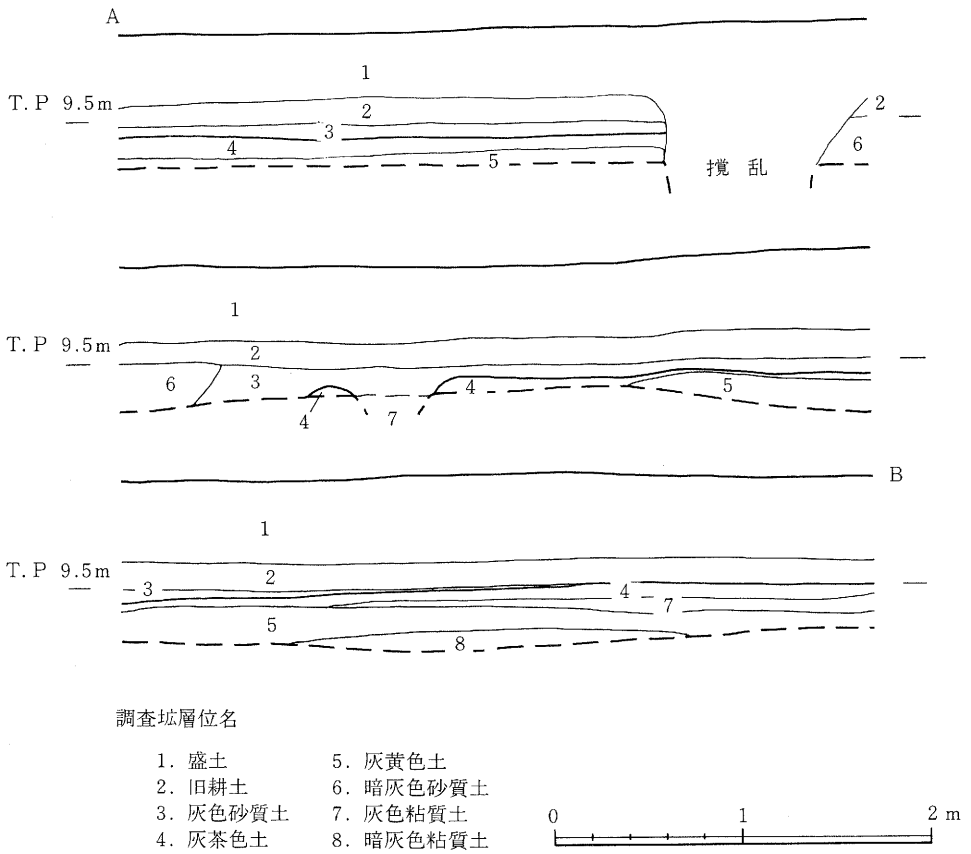


第35図　池浦遺跡遺構図

は茶灰色砂質土、又、Ｐ７は灰色粘質土であった。これらの遺構の性格は、断定できないが、Ｐ１～Ｐ５は、鋤跡痕で、深い部分が途切れ途切れになって残ったものと思われる。そして時期もはっきりとした決め手に欠けるが、堆積土及び層序から判断して、中世から近世に属するものであろう。

出土遺物としては、Ｐ１より青磁片２片、土師器片１片、Ｐ２より土師器片３片のほか、灰黄色土より須恵器片１片が出土したが、いずれも小破片で図示し得るものではない。

以上のことを確認して、遺構図・断面実測図の作成、写真撮影を実施して、調査は終了とした。



第36図　池浦遺跡調査坑断面図

3　まとめ

今回、調査を実施した部分は、池浦遺跡を形成する弥生時代前期の遺構の存在範囲外であった。それは、その時代の遺物を包含する灰黒色系の粘質土が今回の調査に於て見られなかったこと、

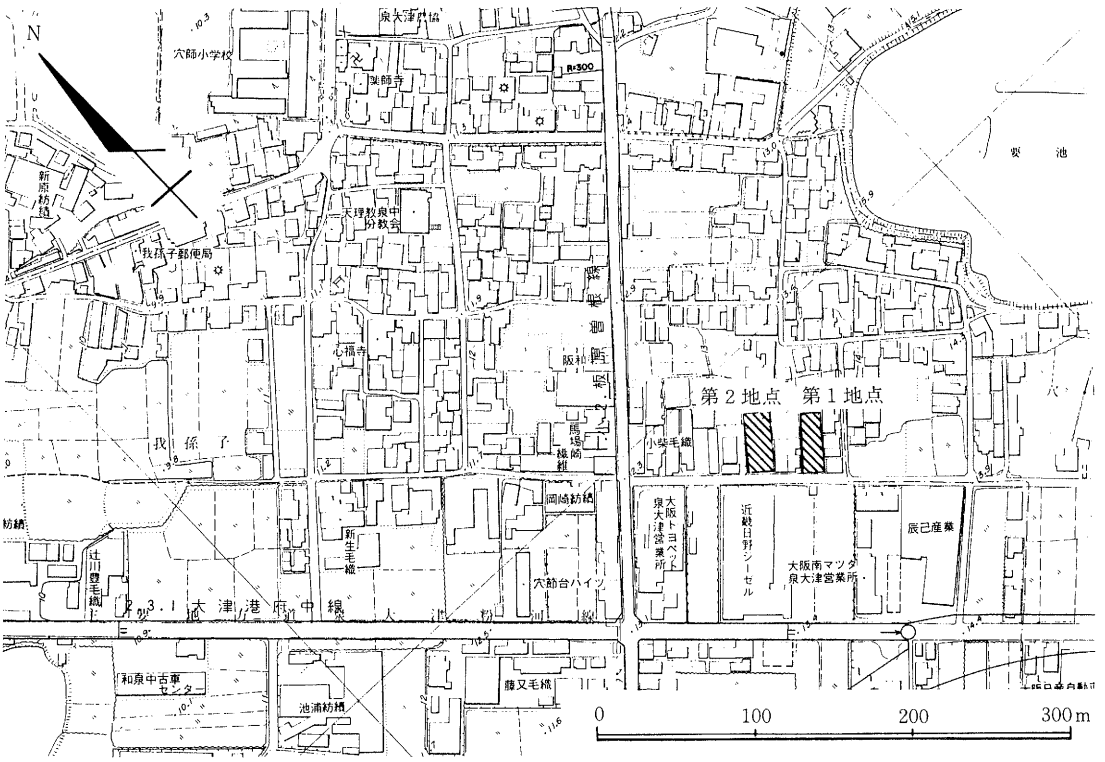
又、弥生土器も発見されなかったことによるものである。もう一つの時期である古墳時代の遺構も検出しえず、その結果遺跡範囲の南東部の限界としてよいであろう。但し、今後も試掘調査等を実施する必要性は今のところまだ残っている。

（坂口）

第７節　穴田遺跡

１　調査に至る経過

昭和31年、穴田に於て、土製羽釜の底を打ち欠いて井戸枠として利用された井戸が発見され[33]、中世の集落跡として周知されているが、出土場所や深さなど発見に関する詳細は不明である。その後調査も行なわれず、その範囲についても不確定であるまま今日に至っており、今後は機会ある毎に調査を実施し、その解明に努めなければならない遺跡の一つである。今回、２ヵ所で開発が計画され、双方相近い場所であったが、発掘調査を実施することができたので、以下に報告する次第である。



第37図　穴田遺跡調査地点図

2　調査結果

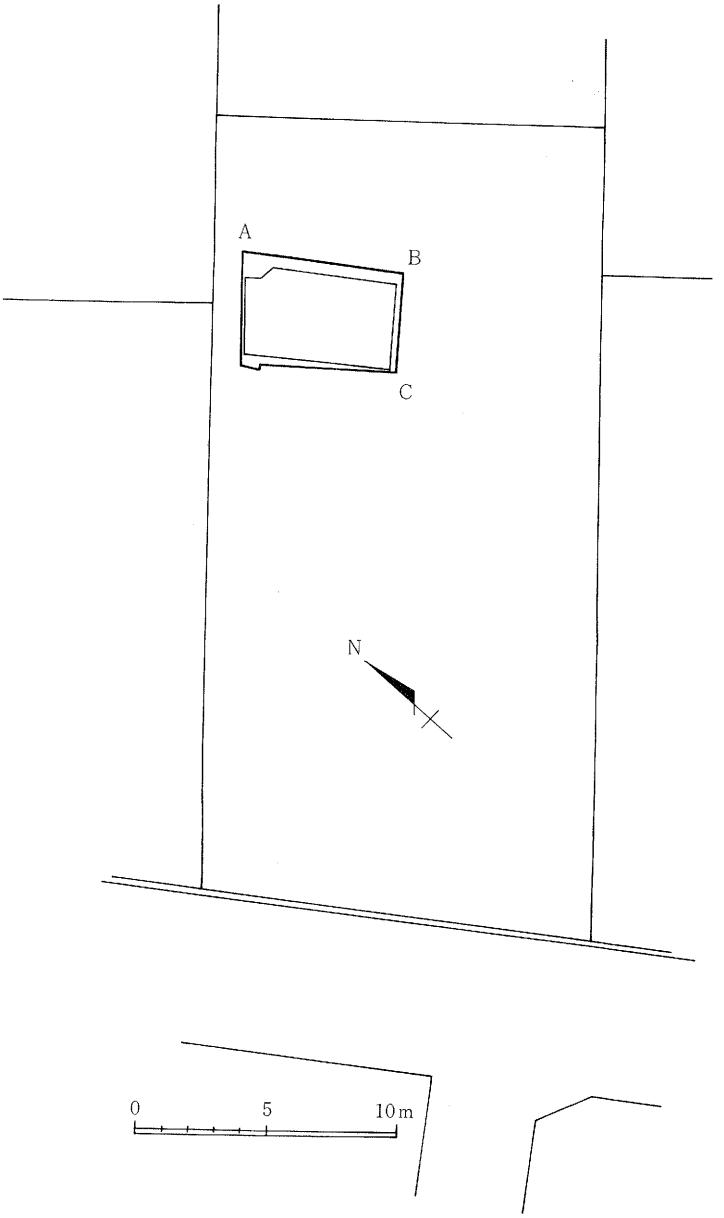
第　1　地　点　（我孫子73－３）

遺　構

倉庫建設に先立つ調査である。敷地面積は736.50㎡である。

敷地の北東寄りに約３ｍ60×５ｍ70の規模の調査坑を設定し、重機により盛土及び耕土を除去し、その後人力により掘削し、調査を実施した。調査面積は約20.5㎡である。

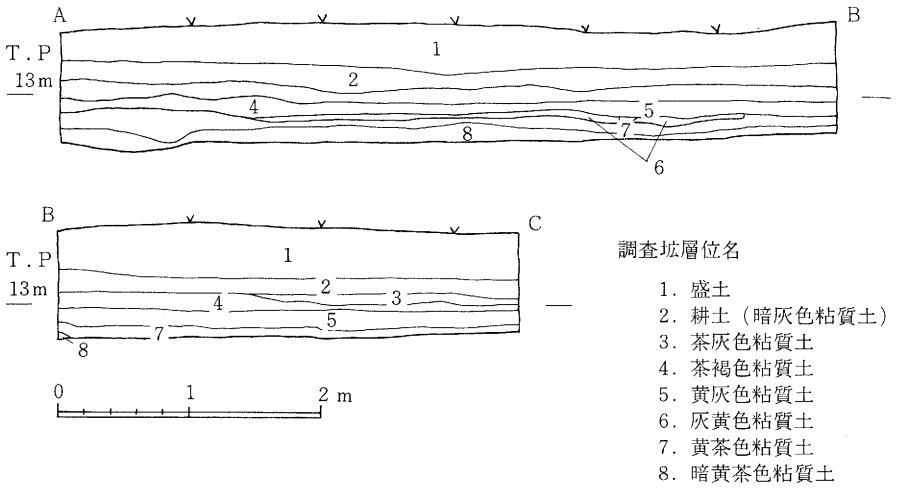
層序（第39図）は上部より盛土約20～40cm、耕土約10～20cm、茶褐色粘質土約８～14cm、黄灰色粘質土約６～16cmで、遺構面である黄茶色粘質土となる。現地表より約60～75cmの深さで標高はＴ.Ｐ12ｍ85前後である。調査坑の南西部には、耕土と茶褐色粘質土との間に茶灰色粘質土層が約８cmの厚さで見られた。茶褐色粘質土層からは、須恵器片・土師器片・瓦器片・瓦片・青磁片がいづれも小破片で出土した。又、黄灰色粘



第38図　穴田遺跡第１地点掘削位置図

質土層からも多数の須恵器片のほか、土師器片・土釜片をはじめサヌカイト片が出土した。（第41図）

遺構面には、灰黄色粘質土が細長く溝状に９条検出した。方向はいずれも北東―南西である。



第39図　穴田遺跡第１地点調査坑断面図

溝１　幅約30cm、長さ約２ｍ60、深さ約６cmである。須恵器・土師器・瓦器各破片出土。

溝２　最大幅約80cm、最小幅約30cm、深さ約４cmで長さは調査区外に伸びるため不明。土師器・瓦器・青磁各破片出土。

溝３　幅約10cm、深さ約２～４cmで長さは調査区外へ伸びるため不明である。土師器・須恵器各破片出土。

溝４　幅約５～15cm、深さ約５cmで中央部は約１cm、長さは南西側が調査区外に伸びるため不明、北東側はやや幅が広くなって壁際で終結する。土師器・須恵器・瓦器各破片出土。

溝５　幅約40cm、深さ約４cm、長さは南西側で調査区外へ伸びるため不明、北東側は、溝４と同様やや幅が広くなり、深くなって壁際で終結する。中央部で幅約10cm、長さ１ｍ20に島状を呈する部分があり、須恵器片が１片出土している。

溝６　幅約25cm、深さ約３cm、長さは南西側で調査区外へ伸びるため不明である。その反対側は、調査区のほぼ中央で終結し、溝の中央部で約40cmの長さの溝に分岐する。土師器・須恵器・瓦器各破片出土。

溝７　幅約18cm、深さ約２cm、長さ約１ｍの規模の溝で、ほぼ中央部に位置する。土師器・瓦器各破片出土。

溝８　最大幅約30cm、最小幅約10cm、深さ約３cmで一部約10cmの部分があり、長さは調査区外へ伸びるため不明。土師器・瓦器各破片出土。

溝９　幅約45cm、深さ約12cm、長さは北東側で調査区外へ伸びるため不明、その反対側は、ほぼ中央部で終結する。北東側の壁際で溝８と継ながる。土師器・須恵器出土。

以上の９条の溝状遺構は、それぞれの間隔は一定ではないが、平行して掘られ、底面も凹凸状を呈し、均一ではない。出土遺物は土師器・須恵器・瓦器・青磁の各破片で器種のわかるものはほとんどない。これらの遺構は、その形状から農耕の鋤跡痕と思われる。又、その時期は、出土遺物から判断して、時代差があるが、凡そ中世に属する遺構であろう。

遺　物

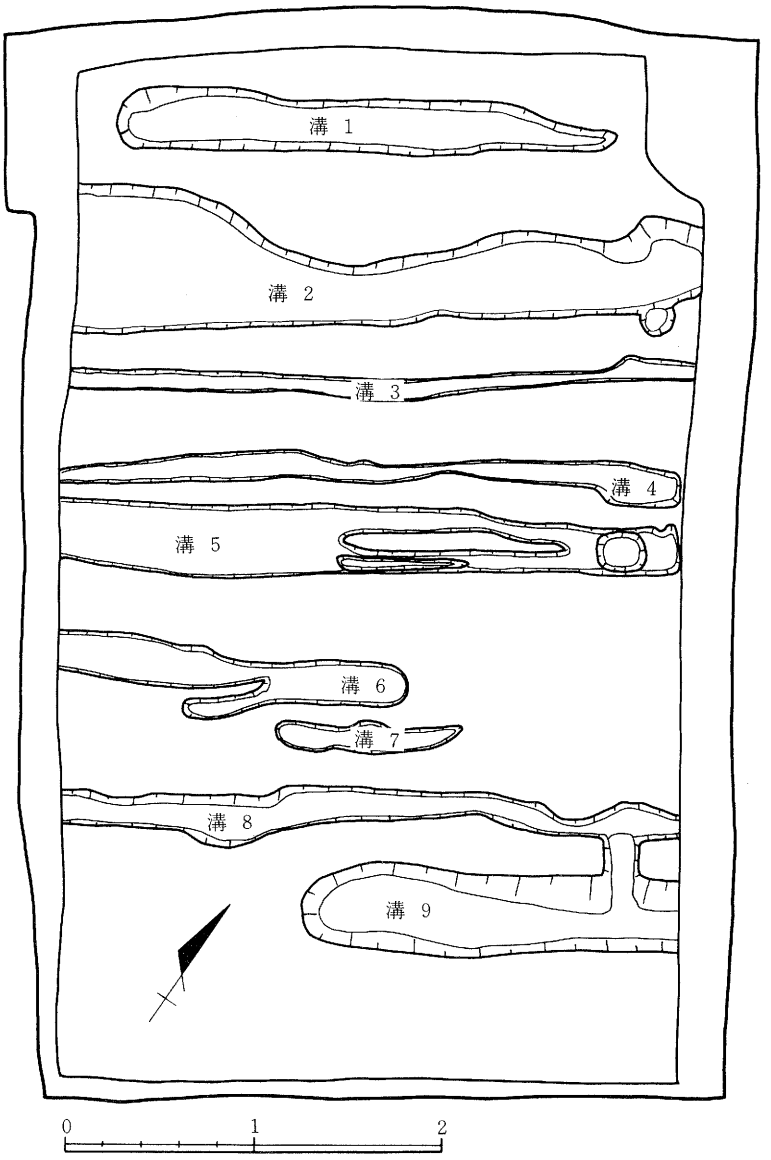
出土遺物は、土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・石器などで、弥生時代のものから中世以降のものまで広範囲にわたっているが、ほとんどが細片で、図示できるものは極わずかである。詳細は遺物観察表に示した。

土師器小皿

（４・５）

４は底部がやや平らで、底部と口縁部との境に稜がみられ、口縁部がやや外反している。

５は口縁部の立ち上がりが小さく、口



第40図　穴田遺跡第１地点遺構図

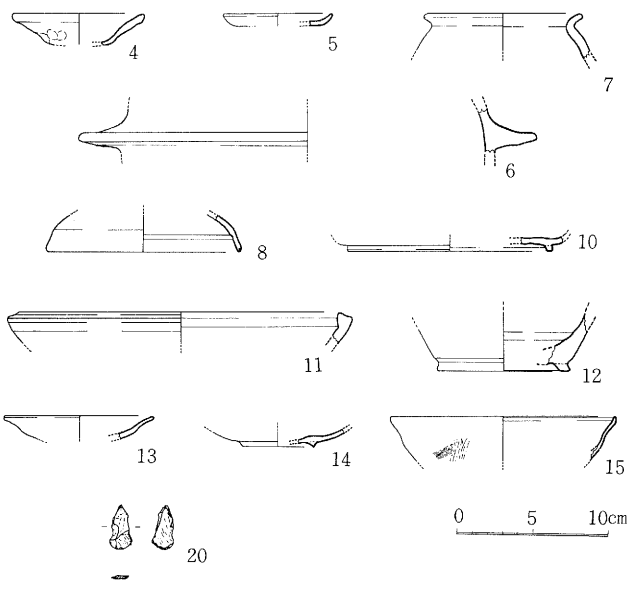
縁端部は外反せず丸く整えられている。そして底部はほぼ平らである。

土師質羽釜（6）

口縁部、胴部が欠損しており、鍔部のみが残存している。鍔部の傾きはほぼ水平で、端面はやや丸味を帯びている。

土師質甕（7）

甕としては割と小型で、口縁部が胴部に対してほぼ直角に「く」の字状に外反している。また、口縁端面はほぼ丸く整えられている。



第41図　穴田遺跡第1地点出土遺物

須恵器杯蓋（8）

天井部が欠損しており、その形状については不明であるが、天井部から口縁部にかけて丸くなだらかにカーブを描いている。そして、口縁部も丸く仕上げられている。II型式4～5段階のものと思われる。

須恵器杯身（9）

立ち上がり部、底部などが欠損しており、図示するには至らなかった。底部から受部にかけて丸味を帯びた稜がみられ、器高は低い。II型式3段階のものと思われる。

須恵器盤（10）

高台部分は低く、ほぼ直立している。口縁部は欠損しており、その形状については不明である。Ⅳ型式2段階のものと思われる。

須恵器鉢（11）

練鉢であると考えられるが、大部分が欠損しており、決め手に欠ける。口縁端面はやや平たく、端部は重厚である。また外面はやや丸味を帯びており、端面内側の先端部に少し角を持っている。

泉大津市域に於ては、練鉢の出土例はほとんどないが、隣接する和泉市の和気遺跡で40個体の練鉢が中世遺構の覆土中より出土した例がある[24]。

須恵器高台付土器（12）

高台部分しか残存しておらず、器種は不明である。高台断面は「ハ」の字形で、底部の端や高台などの特徴からⅣ型式2～3段階に属する壺形土器と思われるが確証はない。

以上の須恵器の編年は、中村浩氏のものによる[55]。

瓦器小皿（13）

底部の形状については欠損のため不明であるが、底部と口縁部との境にわずかに丸味を帯びた稜がみられ、口縁部は外反している。また、口縁端部は丸く仕上げられている。

瓦器椀（14・15）

14は浅いタイプで、粗末な三角形の高台が底部に貼り付けられているものである。また内面には平行暗文が施されている。白石編年[56]のⅢ－１型式に属すると思われ、13世紀前半から中頃のものと推定される。

15は深いタイプで、口縁部しか残存しておらず、底部の形状については不明である。比較的薄手で、口縁部がやや外反しているが、端部はほぼ直立である。白石編年のⅠ－２型式に属すると思われ、12世紀中頃から後半にかけてのものと推定される。

陶磁器（16）

口縁部の一部しか残存しておらず、器種は不明で図示できなかった。素焼きで硬く焼かれたもので、口縁端部は丸く仕上げられており、端部内側に稜がある。外面はナデ又はヘラナデによる段がみられる。

青磁（17～19）

いずれも細片で、良質の精製土を用いて焼かれている。釉色は17が淡茶緑色で、18・19は淡灰緑色であり、素地はすべて乳灰色である。

石器（20）

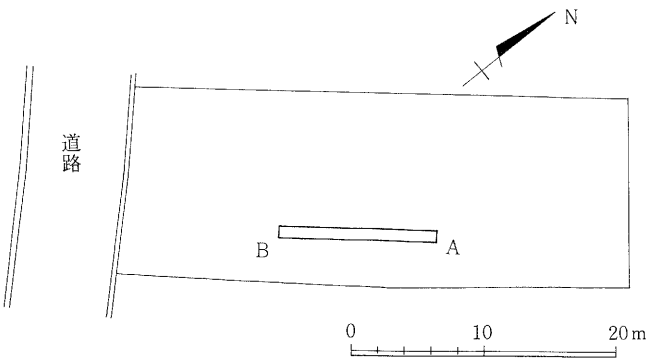
材質はサヌカイトで、細長い三角形の剥片である。人為的に調整された痕跡を有するが、用途は不明である。（池田）

第　2　地　点

（我孫子72－１）

住宅建設に先立つ調査である。敷地面積は554.12㎡である。

第１地点の北西約20ｍの地点で、敷地の南西寄りに調査坑を設定した。幅約90cm、深さ約75cm、長さ約11ｍ90の規模で重機により掘削し、その後、人力に



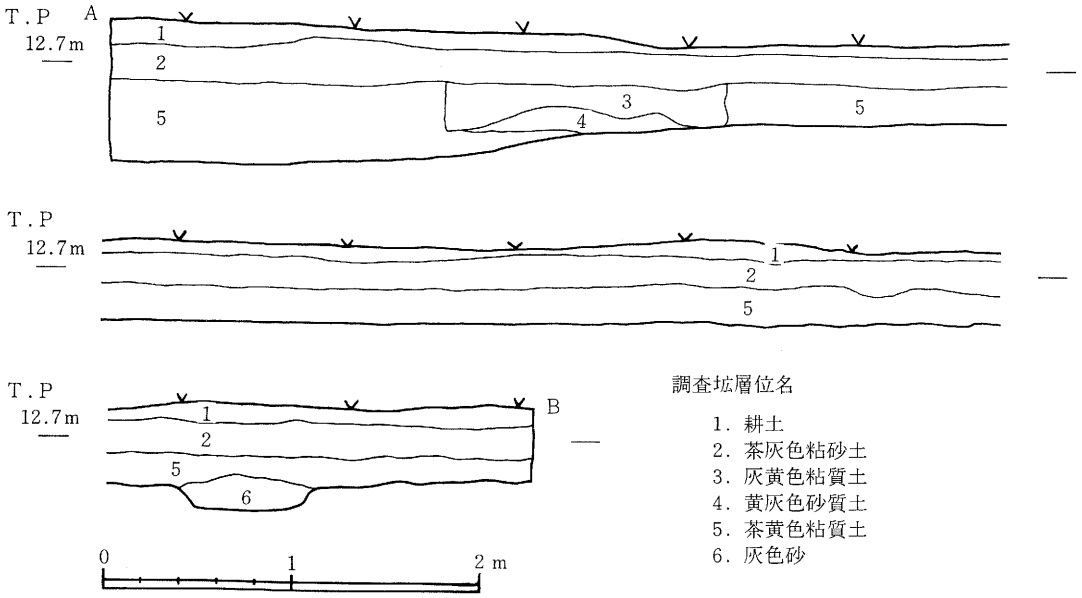
第42図　第42図　穴田遺跡第２地点掘削位置図

より壁面を削り、断面観察を実施した。

層序は上部より耕土約10cm、茶灰色粘砂土約15cm、茶黄色粘質土20cm以上で、北東部では、茶黄色粘質土を切るようにして、茶灰色粘砂土の下に幅１ｍ50、深さ約25cmの灰黄色粘質土と黄灰色砂質土が堆積していた。又、南西部では、茶黄色粘質土の下に幅約70cm、深さ約20cmで灰色砂が間層として見られた。

遺構と考えられるのは、北東部で見られた幅１ｍ50、深さ約25cmの掘り込み部のみである。但しその性格は不明である。

遺物は、土師器片と瓦片の２点が、茶灰色粘砂土より出土したが、小破片のため図示し得ない。



第43図　穴田遺跡第２地点調査坑断面図

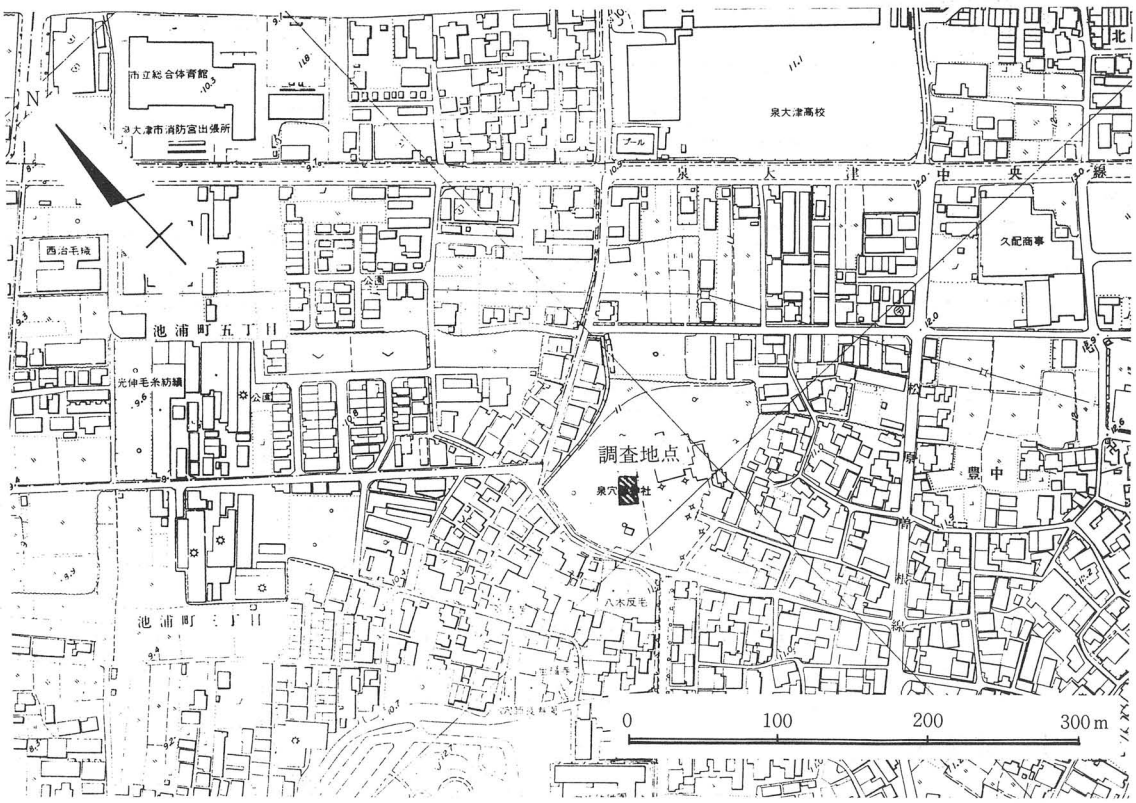
３　まとめ

穴田遺跡の実態は、土製羽釜を枠とした井戸が発見されているほか中世遺物が出土しているだけで、皆目わかっていなかった。今回、上記２ヵ所に於て調査を実施したが、水田跡と思える遺構のみで、多分存在したであろう集落関係の遺構の部分は、依然として不明のままである。この遺跡の範囲は把できていないが、その付近はほとんど宅地化されているので、現在の集落と重複して存在するものと考えられる。今後の調査の機会は、それらの住宅の建て替えの時点となるので、広範囲の発掘調査はほぼ望めない、解明の困難な遺跡の一つである。　（坂口）

第８節　穴師遺跡

１　調査に至る経過

穴師遺跡は、泉穴師神社を中心に直径約200ｍの範囲の遺跡である。泉穴師神社境内の豊中公園や、付近の水田には、土師器片や須恵器片・瓦器片等が散布しているため、周知の遺跡となっている。古墳時代以降の集落跡と考えられるが、現在に至るまで、発掘調査は実施されていない為その実態は不明である。今回、重要文化財に指定されている泉穴師神社本殿外３棟の防災施設として、国庫補助事業である消火設備設置に伴う貯水槽設置工事で掘削に際し立会調査を実施した。

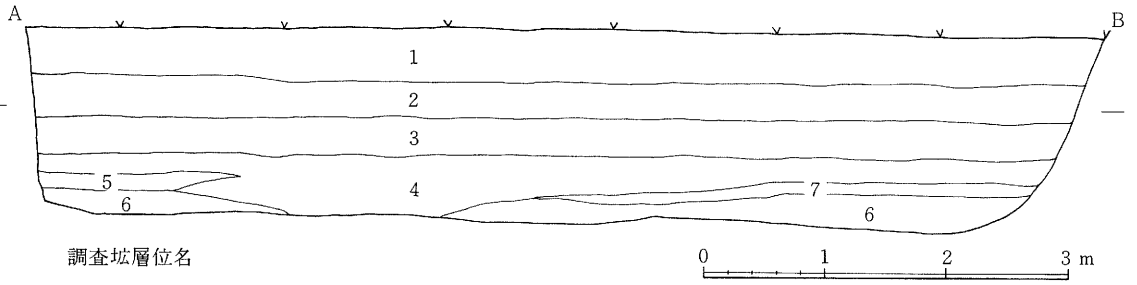


第44図　穴師遺跡調査地点図

２　調査結果（豊中700）

貯水槽設置工事で、約８ｍ80×８ｍ80、深さ約２ｍ60の規模を重機により掘削し、断面観察を行なった。

層序は上部より表土（腐植土）約50cm、黄茶色土（腐植土）約30cm、灰白色土約30cmで、その下は砂層及び砂礫層が交互に堆積している。この場所は社叢であるため、腐植土が厚く堆積しており、灰白色土層は、須恵器・土師器・瓦器・瓦等の破片を包含する。断面観察による限りでは遺構は検出されなかった。その後、掘削が進むにつれ現地表下約３ｍの深さから湧水が始まった。工事の進捗に伴い５ｍまでは掘削を行なったが、湧水と土砂崩れで作業は困難をきわめた。



1．表土　2．黄茶色土　3．灰白色土　4．灰色礫（砂混り）
5．赤茶色粗砂　6．灰茶色粗砂　7．灰色砂

第45図　穴師遺跡調査坑断面図

3　まとめ

今回、調査を実施した部分は、地元の人によると大正年間位までは、湧水池であり、農業用水として利用されていたが、以後、付近に染色工場ができ、地下水の汲み上げで、地下水位が下がり、湧水はなくなり、池は埋もれて現在見られるような姿になったとのことである。この立会調査に於ては、遺物の出土があったが、遺構の存在は見られなかった。今後、周辺部に於ても、機会ある毎に調査を実施し、その成果に期待するところである。

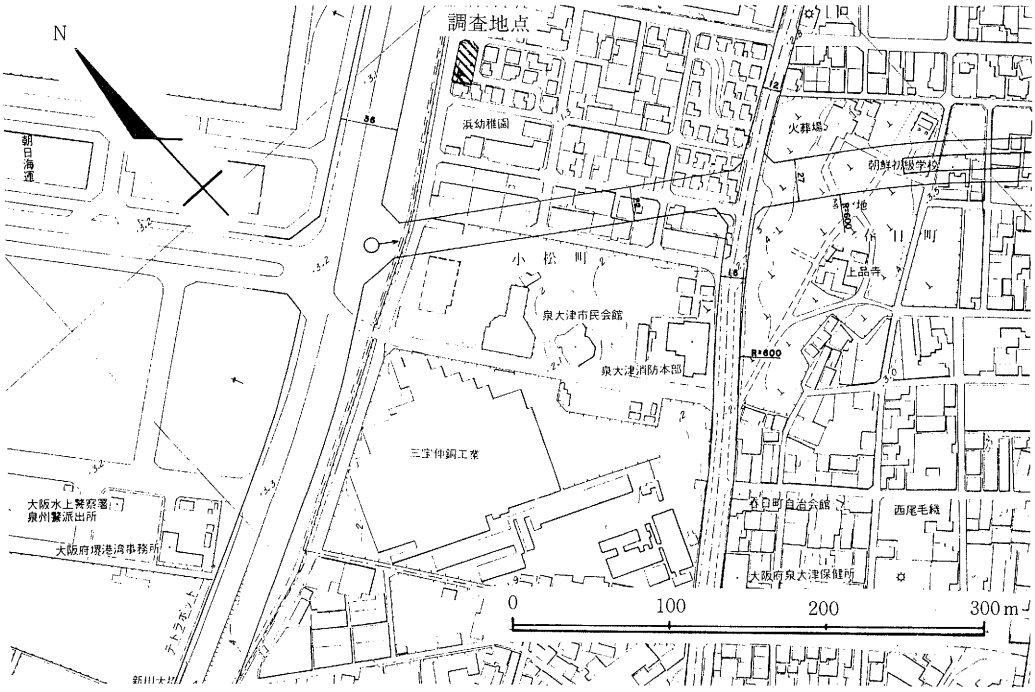
（坂口）

第９節　遺跡範囲外試掘調査

1　調査に至る経過

府建築部住宅建設課では、木造平屋建の府営住宅を、順次鉄筋コンクリート造りに建替える予定であるが、泉大津市小松町に所在する府営住宅も、木造平家建で老朽化が著しいため、昭和60年度より工事が実施されるようになった。それに先立ち府建築部では、埋蔵文化財の有無を確認する為、調査を市教育委員会に依頼してきた。当該地は埋蔵文化財包蔵地に属さないが、工事中

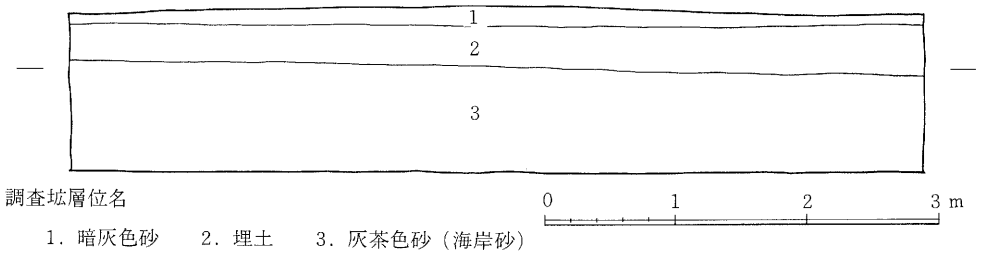
の不時発見となると、その工事に支障が生じるということで、市教育委員会では試掘調査を実施することとなった。



第46図　小松町試掘調査地点図

2　調査結果　（小松町12，13）

木造平屋建住宅の撤去後、重機により幅約２ｍ、深さ約１ｍ20、長さ約６ｍ50の規模の調査坑を掘削した。層序は上部より、暗灰色砂約10cm、埋め立て土約25～35cm、灰茶色砂約75cm以上となっている。地表下95cm位の部分から激しい湧水がみられ、砂の崩壊が起こったので、これ以上の掘削は中止し、観察調査を実施した。その結果遺構・遺跡等は発見されなかった。



第47図　小松町試掘調査坑断面図

3　まとめ

当該地の西側は、海を埋め立て府道大阪臨海線や、府営泉北上屋が建設されている。しかし、昭和30年代中頃までは、白砂青松の海岸線があり、静かな海辺の住宅地であった。現在も当該地と道路を隔てて当時の堤防が残っている。

今回、調査を実施した部分は海岸の砂浜を埋め立てた場所を宅地とした所である。掘削に於ては、この砂層が見られ、遺構は発見されなかった。又、遺物も検出されなかったので、遺跡が存在するとは認め難く、上記の調査で終了とした。

（坂口）

引　用　文　献

① 高石市教育委員会『大園遺跡発掘調査概要』 1976・3

② 和泉市史編纂委員会『和泉市史』第一巻 1965・10

③ 和気遺跡調査会『和気』 1979・3

④ (財)大阪府埋蔵文化財協会『泉州の遺跡』 1986・2

⑤ 大阪府教育委員会『第2阪和国道内遺跡発掘調査概報 —— 板原遺跡 —— 』 1980・3

⑥ 豊中・古池遺跡調査会『豊中・古池遺跡発掘調査概報 そのⅢ』 1976・3

⑦ 泉大津市教育委員会『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報3』 1985・3

⑧ 第2阪和国道内遺跡調査会『第2阪和国道内遺跡発掘調査報告書4』 1971・9

⑨ 甲元真之「弥生人の食料」『季刊 考古学』第14号 1986・2

⑩ 泉大津市教育委員会『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報2』 1984・3
泉大津市教育委員会『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報3』 1985・3

⑪ 泉大津高校地歴部『和泉の古代遺跡』和泉考古学第5号 1961・3

⑫ 大阪府「弥生文化と農耕」『大阪府史』第一巻 1983・3

⑬ 調査時点では要池遺跡であったが、現在は古池遺跡として遺跡分布図に記載されている。

⑭ 岸和田市教育委員会『岸和田市春木八幡山遺跡の研究』 1965

⑮ 末永雅雄・島田暁・森浩一『和泉黄金塚古墳』 1954・3

⑯ 大阪府教育委員会『七ノ坪遺跡発掘調査概要』 1974・3

⑰ 大阪府教育委員会『七ノ坪遺跡発掘調査概要Ⅲ』 1984・3

⑱ 泉大津市教育委員会『豊中遺跡発掘調査概要Ⅲ』 1979・3

⑲ 和泉市史編纂委員会『和泉市史』第一巻 1965・10

⑳ 大阪府教育委員会『要池遺跡発掘調査概要Ⅰ』 1975・3

㉑ 大阪府教育委員会『第2阪和国道内遺跡発掘調査概報 —— 板原遺跡 —— 』 1980・3

㉒ 豊中・古池遺跡調査会『豊中・古池遺跡発掘調査概報 そのⅢ』 1976・3
泉大津市教育委員会『豊中遺跡発掘調査概報Ⅲ』 1979・3

㉓ 和気遺跡調査会『和気』 1979・3
和気遺跡調査会『和気Ⅱ』 1981・9

㉔ 泉大津高校地歴部『和泉の古代遺跡』和泉考古学第5号 1961・3
和泉市史編纂委員会『和泉市史』第一巻 1965・10

㉕ 泉大津高校地歴部『和泉の古代遺跡』和泉考古学第5号 1961・3

㉖ 泉大津市教育委員会「第3章 第1節豊中遺跡」『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報2』 1984・3

㉗ 泉大津市教育委員会『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報3』 1985・3

㉘ 大阪府教育委員会『大園遺跡・豊中遺跡範囲確認調査概要』 1974・3

㉙ 高石市教育委員会『大園遺跡発掘調査概要』 1977・3

㉚ 大阪府教育委員会『大園遺跡・古池遺跡発掘調査概要』 1978・3
大阪府教育委員会『大園遺跡発掘調査概要Ⅴ —— 府道松原～泉大津線建設予定地内 ——』 1981・3
大阪府教育委員会『大園遺跡発掘調査概要Ⅵ —— 第2阪和国道建設に伴う発掘調査 ——』 1981・3

㉛ 大阪府教育委員会『第２阪和国道内遺跡発掘調査概報 —— 板原遺跡 —— 』 1980・３
㉜ 大阪府教育委員会「泉大津市池浦遺跡発掘調査概要」『節・香・仙』 1972・
㉝ 泉大津高校地歴部『和泉考古学・別冊考古学調査報告１』 1958・２
㉞ 和気遺跡調査会『和気II』 1981・９
㉟ 中村浩『和泉陶邑窯の研究』 1981・11
㊱ 白石太一郎「越智氏居館跡出土の瓦器 —— 瓦器の終末年代に関連して —— 」『古代学研究』第85号 1977・11

遺物観察表

板原遺跡　第3地点

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
1	16.0	(残存高) 2.2	1㎜程度の砂粒を含み、微砂粒を少し含む。淡茶褐色	剝離のため、調整不明。	溝1・灰色粘質土	口縁部外面にスス付着。焼成：やや不良 質　：軟質
2	9.2	(残存高) 1.5	微砂粒を少し含む。黒灰色	内外面ナデ。	表採	焼成：ほぼ良好 質　：やや軟質
3	——	——	緻密。内面 — 暗灰緑色 外面 — 灰茶色	外面回転ナデ。	盛土(拡張部)	内面に施釉 釉色 — 暗灰緑色 焼成：良好 質　：硬質

穴田遺跡　第1地点

土師器

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
4	8.8	(残存高) 2.1	微砂粒を少し含むが、ほぼ精製土。淡茶色	内外面ナデ。外面立ちあがり部指圧痕。	黄灰色粘質土	焼成：良好 質　：軟質
5	7.4	(残存高) 1.9	微砂粒を少し含むが、ほぼ精製土。内面 — 淡茶褐色 外面 — 赤褐色	内外面ナデ。	表採	焼成：良好 質　：軟質
6	(鍔径) 36.0	(残存高) 3.0	1㎜程度の砂粒を少し含み、微砂粒を多く含む。内面 — 淡茶色 外面 — 淡茶褐色	内面ナデ。外面は摩滅のため、調整不明。	黄灰色粘質土	焼成：ほぼ良好 質　：軟質
7	10.6	(残存高) 4.1	1㎜から2㎜程度の砂粒を含む。内面 — 濃茶褐色 外面 — 淡茶褐色	摩滅のため調整不明。	黄灰色粘質土	焼成：ほぼ良好 質　：軟質

須恵器

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
8	13.0	(残存高) 2.5	微砂粒を含む。内面 — 灰色 外面 — 濃灰色	内外面回転ナデ。	黄灰色粘質土	口縁部内面に沈線文。焼成：良好 質　：硬質
9	——	——	微砂粒を多く含む。灰色	内外面回転ナデ。	黄灰色粘質土	焼成：良好 質　：硬質
10	(高台径) 13.7	(残存高) 1.0 (高台高) 0.4	微砂粒を少し含む。灰色	内外面回転ナデ。	茶褐色粘質土	焼成：良好 質　：硬質

須恵器

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
11	23.0	(残存高) 2.1	微砂粒を少し含むが、ほぼ精製土。 内面 — 灰色 外面 — 暗灰色	内外面回転ナデ。	黄灰色粘質土	焼成：良好 質　：硬質
12	—— (高台径) 8.8	(残存高) 3.9	微砂粒を少し含む。 淡灰色	内外面回転ナデ。 高台から底体部にかけてヘラ削り。	黄灰色粘質土	焼成：良好 質　：硬質

瓦　器

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
13	10.0	(残存高) 1.6	微砂粒を少し含む。 黒灰色	内外面ナデ。	溝2	焼成：良好 質　：やや硬質
14	—— (高台径) 4.8	(残存高) 1.3	精製土。 黒灰色	内外面ナデ。	西地区トレンチ	内面に平行暗文。 焼成：ほぼ良好 質　：やや軟質
15	15.0	(残存高) 3.1	精製土。 内面 — 淡茶灰色 外面 — 暗茶灰色	内外面ナデ。 内面口縁部ヘラ磨き	溝6	焼成：良好 質　：やや軟質

陶磁器

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
16	——	——	1㎜から4㎜程度の砂粒を少し含むが、ほぼ精製土。 暗赤茶色	内外面回転ナデ。 外面口縁部ヘラナデ。	黄灰色粘質土	外面口縁部にヘラナデによる段がある。 焼成：良好 質　：硬質
17	——	——	緻密。 地 — 乳灰色 釉 — 淡茶緑色	——	茶褐色粘質土	青磁片 焼成：良好 質　：硬質
18	——	——	緻密。 地 — 乳灰色 釉 — 淡色緑色	——	溝2	青磁片 焼成：良好 質　：硬質
19	——	——	緻密。 地 — 乳灰色 釉 — 淡灰緑色	——	表採	青磁片 焼成：良好 質　：硬質

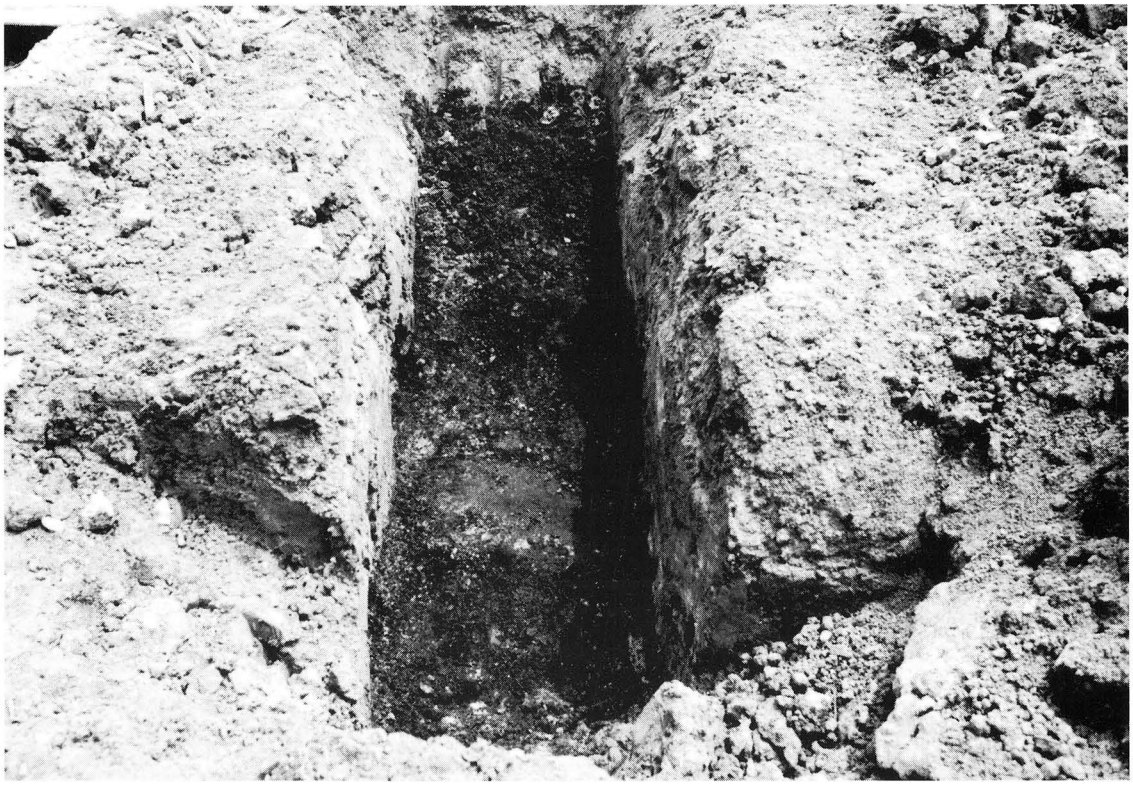
石　器

No.	法量	(cm)	石材・色調	加工	出土場所(層)	備考
20	大きさ (残存長) 最大厚	2.9×1.5 0.2	サヌカイト 灰黒色	剝離加工。	黄灰色粘質土	不定形刃器

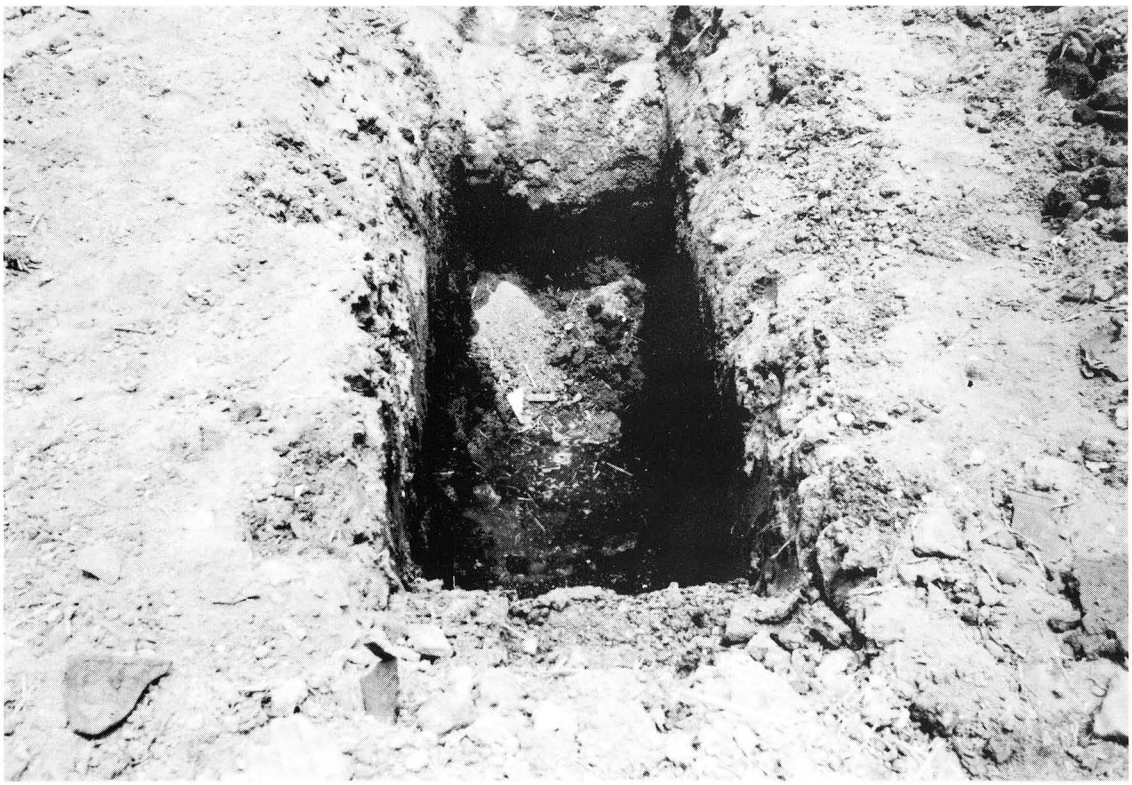
(池田)

図　　版

池上・曽根遺跡第１地点調査坑１



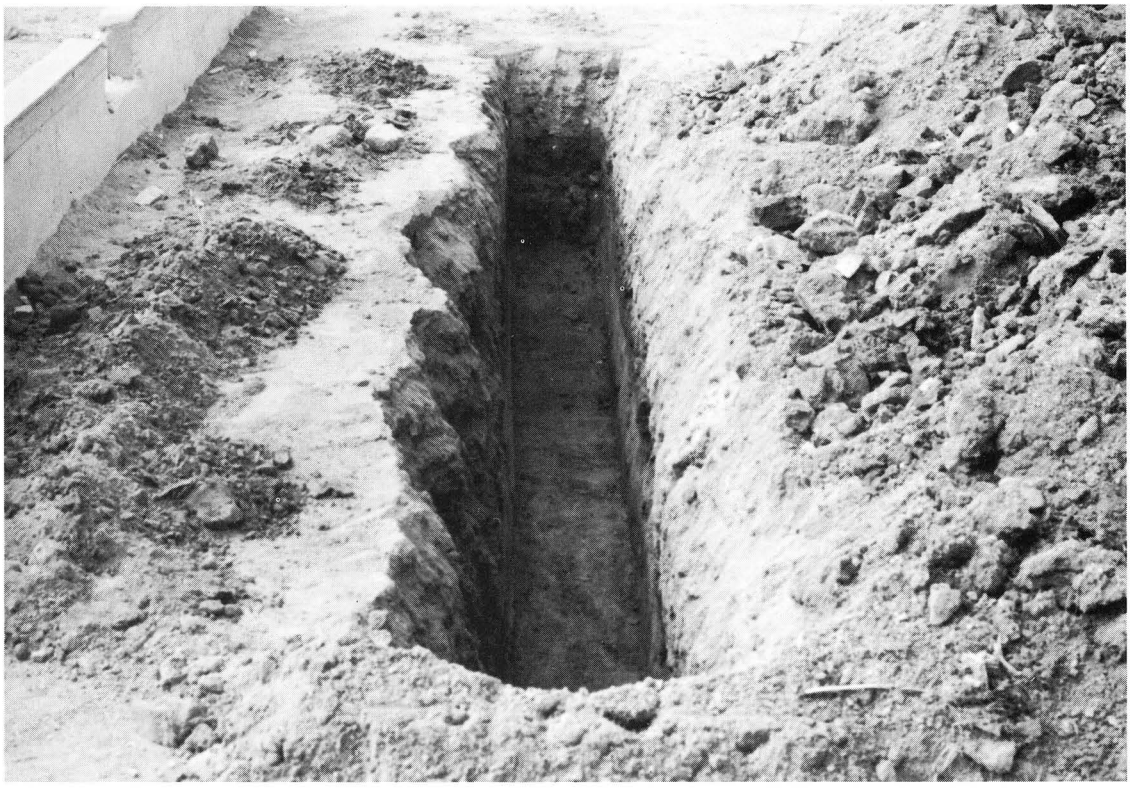
池上・曽根遺跡第１地点調査坑２



池上・曽根遺跡第 1 地点調査坑 3

池上・曽根遺跡第 3 地点調査坑

豊中遺跡第１地点調査坑

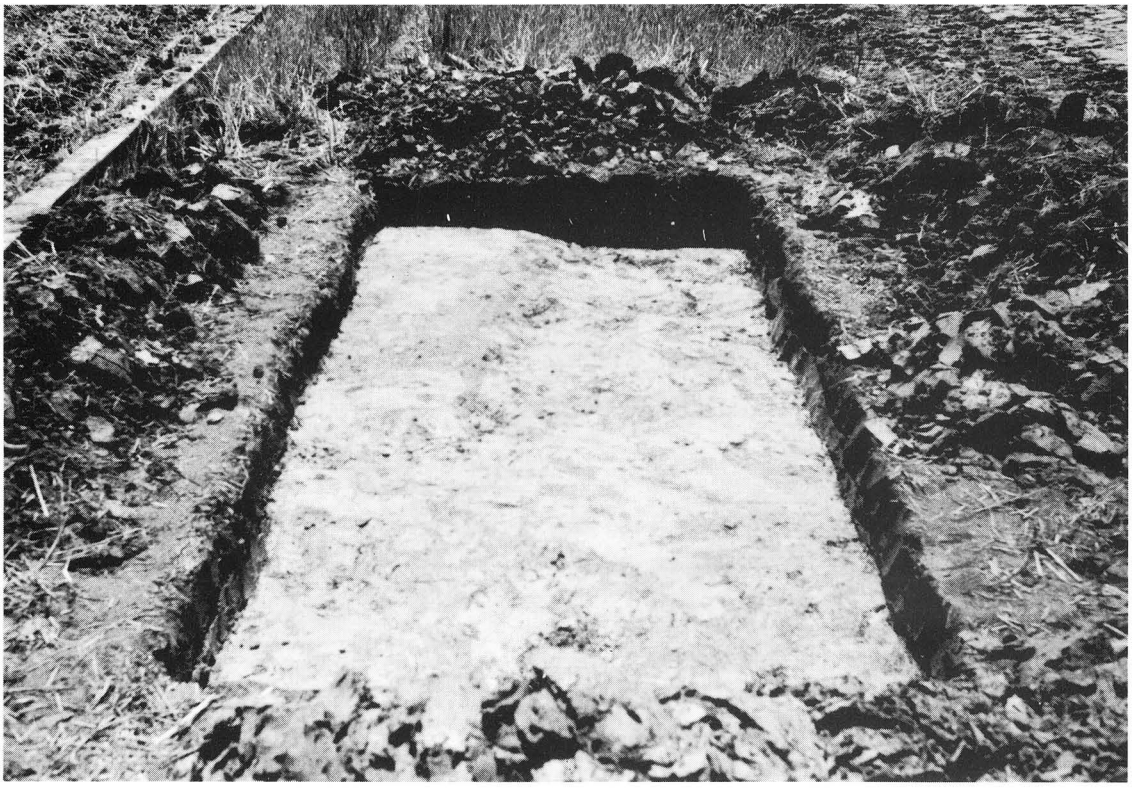


豊中遺跡第２地点調査坑

虫取遺跡調査坑

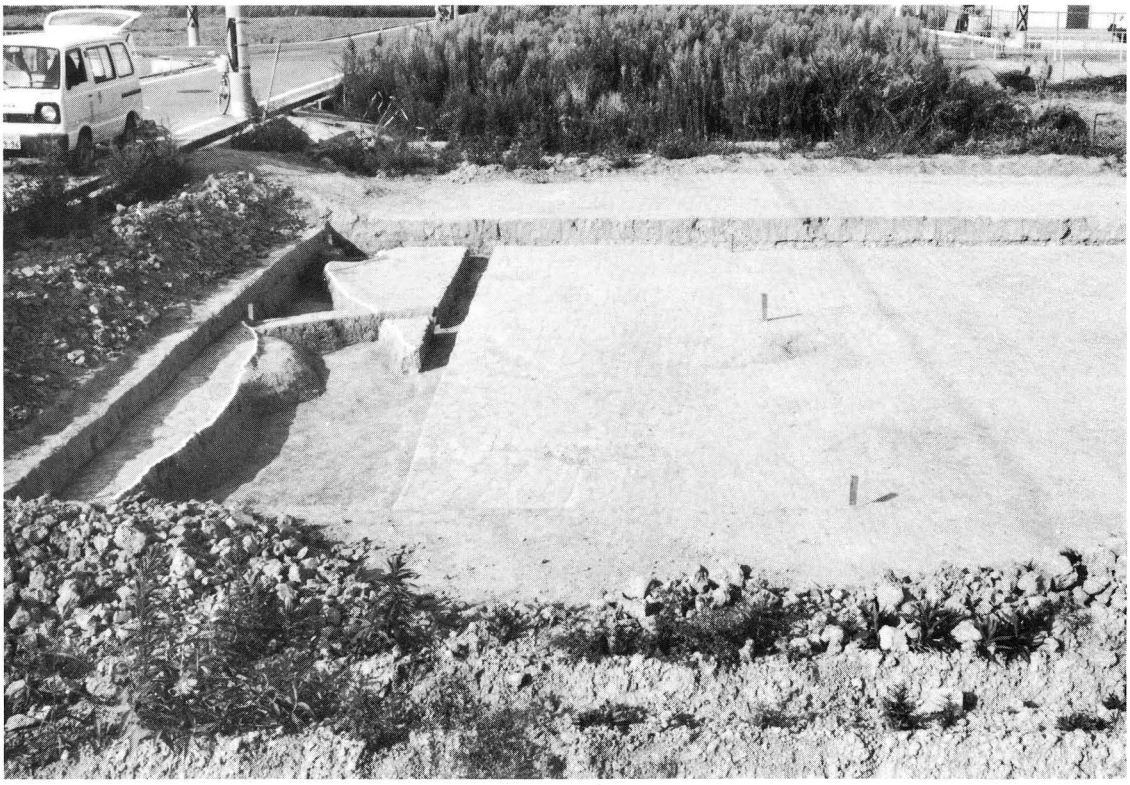
大園遺跡第２地点調査坑

板原遺跡第１地点調査坑



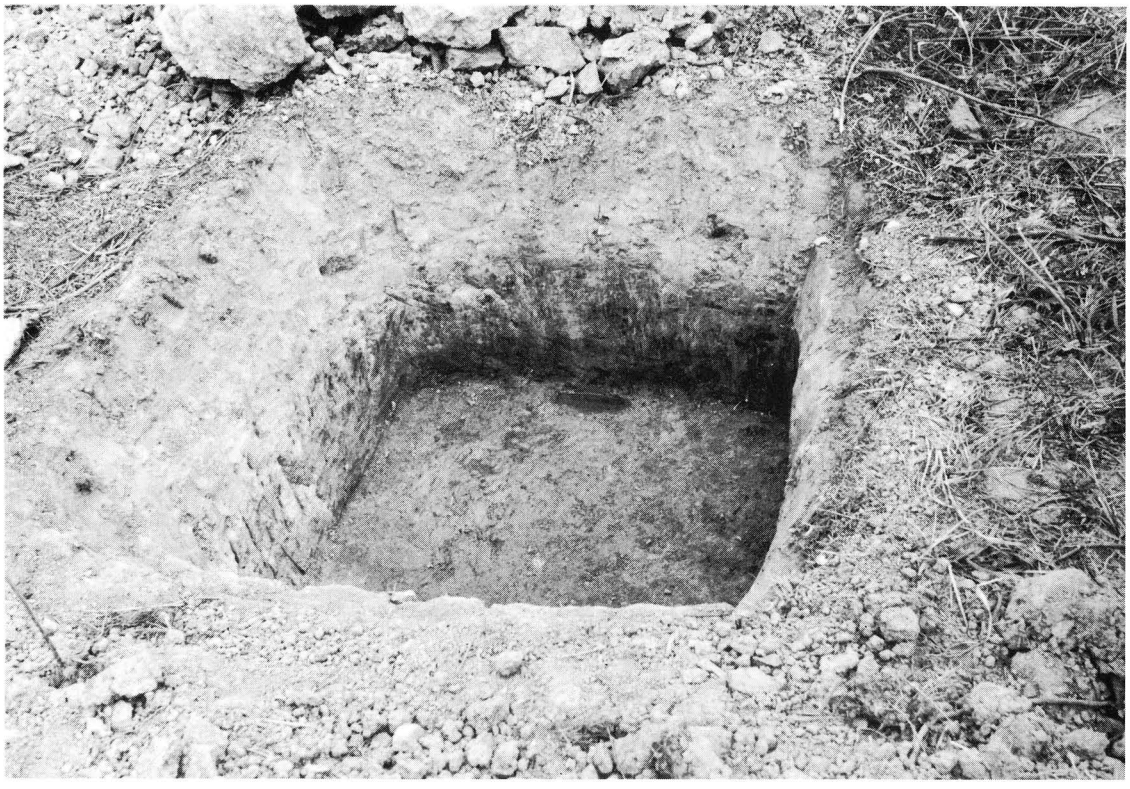
板原遺跡第２地点調査坑

板原遺跡第３地点調査前



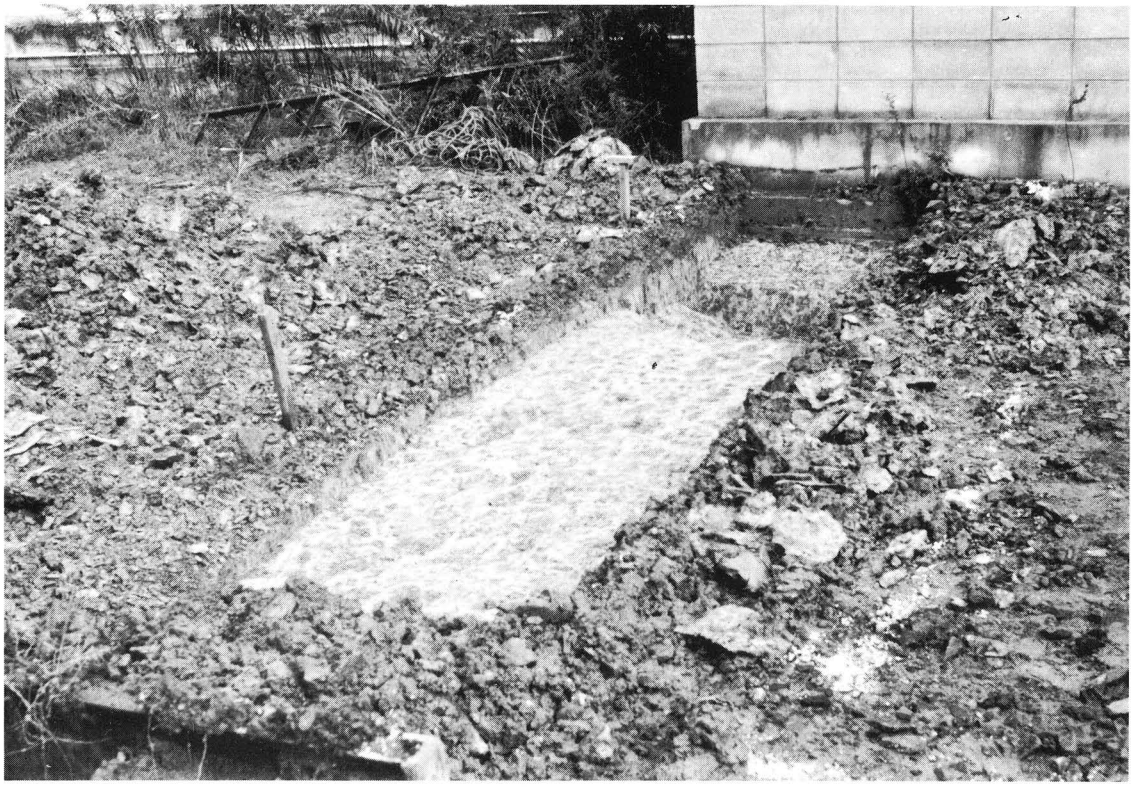
板原遺跡第３地点全景（南から）

板原遺跡第３地点グリッド１



板原遺跡第３地点グリッド２

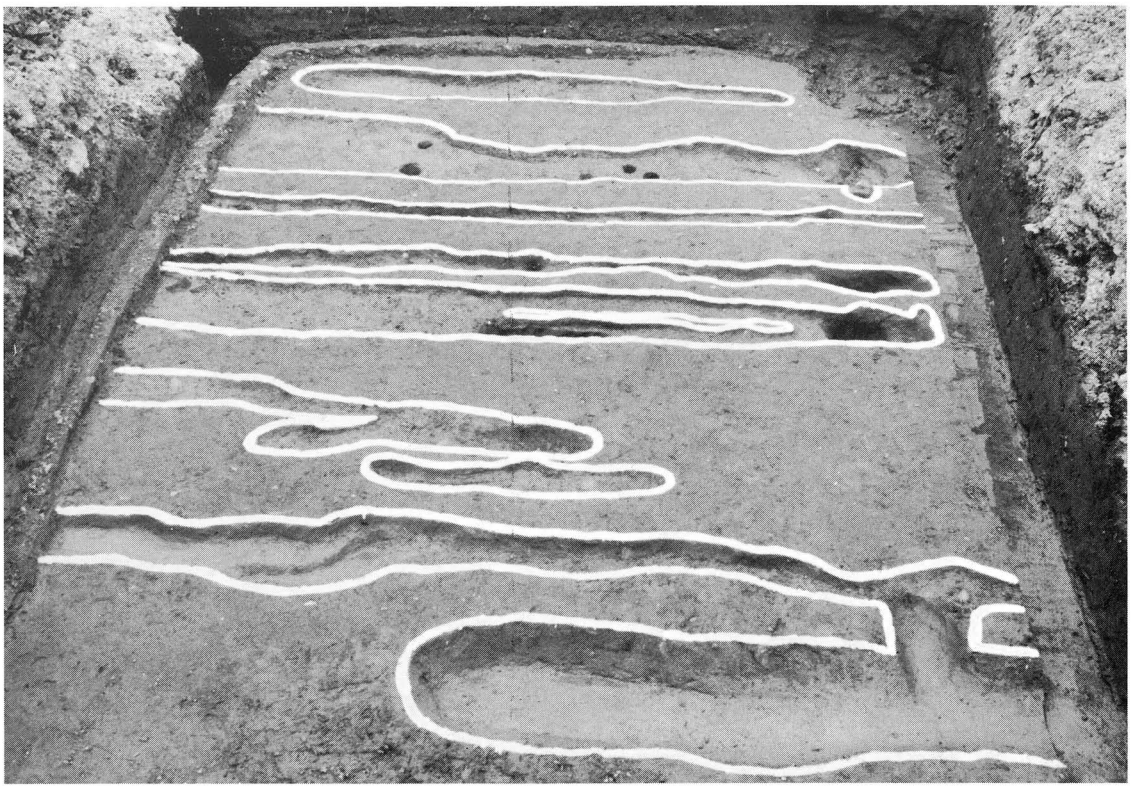
板原遺跡第３地点グリッド３



板原遺跡第４地点調査坑

池浦遺跡遺構全景

池浦遺跡遺構全景



穴田遺跡第１地点遺構全景

穴田遺跡第２地点調査坑

小松町府営住宅内試掘調査坑

穴師遺跡調査坑

泉大津市文化財調査報告12
泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報4

１９８６年３月

発　行　泉大津市教育委員会
編　集　社　会　教　育　課
泉大津市東雲町９番12号

印　刷　和泉出版印刷株式会社
泉大津市東豊中１－６－２